

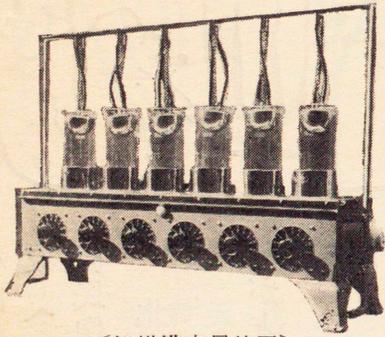
ふしめ

1

東京農大畜友会



# 新しい農林畜産器械



〔粗織維定量装置〕

農業技術研究所  
 森本 宏 先生 御考案  
**MY式窒素蒸留装置**  
**電気恒温乾燥器(電子管式)**  
**各種飼料分析装置**

電気式精液採取器(牛・豚・羊用)  
**鶏人工採精器**  
 理化学器械設計製作

## 三 紳 工 業 株 式 会 社

本社営業所 東京都千代田区神田富山町29番地  
 電話東京(291) 9039・9828 番  
 横浜営業所 横浜市港北区高田町1047番地  
 電話横浜(45) 2117 番

## — 原 稿 募 集 —

編集部では、ふじみの、第二号の原稿を募集致します。より一層充実したものとする為にも、特別会員、学生の多数の御協力をお願い致します。

記

メ 切 三十七年一月末日迄

要 項 ○論文、随想、記行文、主張、歌

四〇〇字詰—十枚以内

○写真カット、は随意

○表紙図案、三色以内、

宛 名 東京都世田谷区世田谷四の四六〇

東京農業大学畜産学科畜友会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和三十七年四月十日予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会、ふじみの、

編集委員会

TEL 4215-175(代)

巻頭言

摺 挨

畜産学科発展の年

新入生を迎えて

論文 牛の体質に関する血清学的研究

速報 家兔筋肉蛋白質及びアミノ酸分析

畜友会委員長 高山昭夫 (3)

畜産学科科長 平林忠 (4)

副委員長 黒坂明弘 (5)

副委員長 高州康広 (5)

昭和三十四年度優秀卒論 岩瀬伸夫 (6)

理化分析研究室 吉田大一 (14)

座談会

思い出を語る 司会 西田修 (17)

顔 農場長 石原大右エ門先生の巻 K (21)

想

茂原から世田谷へ

食肉随想

動物は不道德のか

馬放談

ルイセンコ学説に対する私見

畜産学科主事 鈴木正三 (30)

助教授 鬼原新之丞 (31)

畜産製造研究所 三狩野貞雄 (32)

助教授 三滝川昌広 (33)

家畜診療所 三滝川昌広 (34)

随

檜山化する郷土

友への手紙

農民像への錯綜

旅 北海道遊山

花がとりもつ恋

脱走

詩想

二年 笠原秀成 (22)

三年 国実直 (24)

三年 高山昭夫 (26)

雪国の農家にあるもの

畜二 片山洋 (39)

畜三 佐藤晃 (40)

畜二 木田英宣 (43)

畜三 堀宏充 (50)

便り 畜産製造研究室 渋谷留雄 (53)

研究室 養鶏研究所 佐野信夫 (53)

家畜育種研究室 池田孝温 (54)

獣医研究所 上田貫一 (55)

飼養研究室 菊地一夫 (55)

養豚研究所 田原孝二 (56)

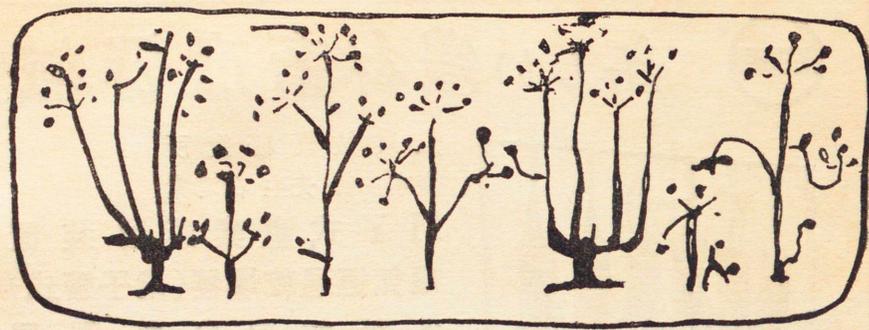
学会だより 春の畜産関係学会 教授 鈴木正三 (29)

声 畜友会より 畜友会規定 短信 (16)

三十五年度卒論一覧表 特別会員住所録 (63) ひとこと (29)

三十五年度卒論一覧表 (60) 茂原分校移転について (51)

△クラビア説明△  
我々畜産学科が生まれ育った茂原分校のある一帯は富士見野と呼ばれる。会報のふじみのもこの名残りを惜しむ由縁である。澄みみった青空の下にサイロと家畜のコントラストは富士見野一帯の風景を良く現わしている。田中一栄先生の傑作である。



ふ  
ろ

東京農業大学畜産学科畜友会

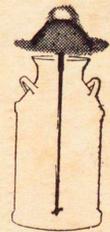
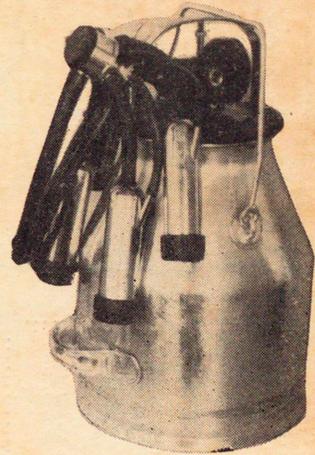


# オリオンの



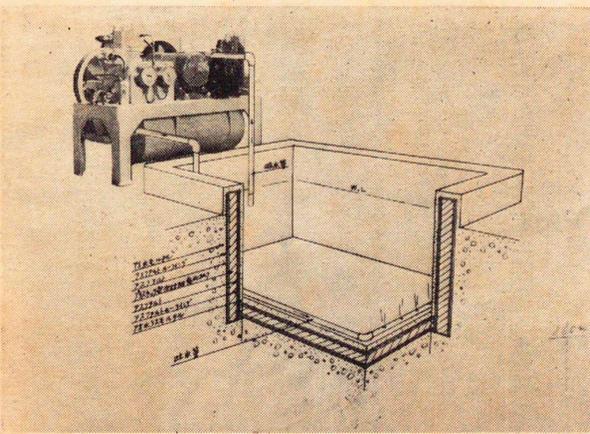
電攪乳機

自動攪乳機



型式 CK400型消費電力430W<100V>冷却能力  
1,000Kcal/毎時冷媒ガスフロン-12 冷却液  
量 600l 予冷温度5°C35°C2石の牛乳を冷すと  
15°Cに急冷され以後5°C迄徐冷

- 特徴
- ① 従来のクーラーのように配管、取付の手数がありません。
  - ② 冷却水による間接冷却方式のため小出力でも大量の牛乳が冷せます。
  - ③ 従来の水槽をそのまま利用できます。
  - ④ フロンガスを封入してありますから配線すれば直ちに使えます。



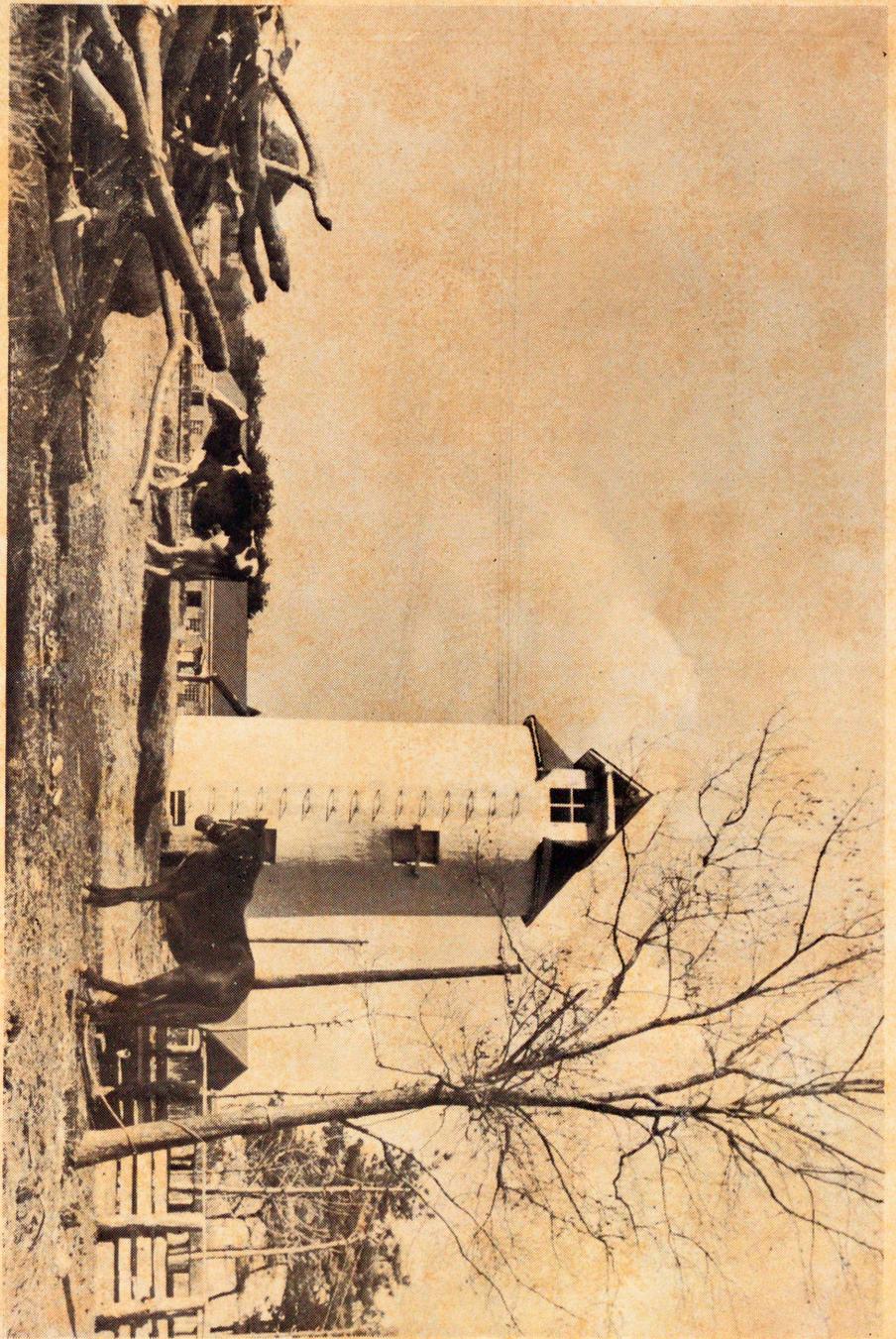
## オリオン電気攪乳機の特徴

- ① マッサージスタイル  
＜圧縮型搾乳による光  
全搾乳＞
- ② 堅牢・優美で取扱い容  
易
- ③ 完全密閉式ですから衛  
生的です
- ④ 近代的設備と合理的量  
産体制でコストの引下  
げを計り、従来の搾乳  
機に較べ非常に安い

従来不完全だった攪拌がオリオン自動攪拌の発売により2等乳の防止更に安定性を加え時間を有効に使えます(電圧100V<普通電燈線>電力量15W1斗,2斗兼用)

## 共栄精機製作所

本社工場 長野県須坂市亀住町157  
TEL(須坂)1230~1 振替長野 8238  
東京営業所 東京都千代田区神田佐久間町1の14  
(小串ビル三階)  
TEL (251) 9602・2528



## 巻頭言

畜友会委員長 高山昭夫

新春を迎え、全て躍動を感じる今日この頃である。今年は畜産学科にとっては大きな過渡期といわれる。私自身色々の意味から、今後の本学科が、よりよき発展をとげる様に、又、発展をさせる様に、すべての関係者に心ひそかにお願いしている。

一応移転も形のととのった所で、畜産教育、畜産技術者とは本校において如何にあるべきか。もう一度我々のイメージを描いてみたい。近年の農業情勢は急速な転回の中にあり、それにもまして近代科学はめざましい発展をとげていることを思えば、のんびりなどできない。

この岐路に立って、我々の学習の場もより発展的方向へと創造することが、学生、各々に与えられた責務であると信じます。学生生活は非常に短い、その間に研究室や運動部、文化部でそれぞれの生活を豊富にしている同志が、教職員、先輩の方々とも自由な関係をもって、議論し交流し学生生活の総決算を、有意義にしたい。真に畜友会の目的も此処にある。

色々と会員の総意を反影した行動はむづかしいが、会報が活気のある畜産学科の象徴でありたいものです。

自由な交流の中に生まれるものは、我々の学習活動に無視できないであろう。その意味で、畜友会の意義を会員皆様の自覚で、もり上げて戴きたいと願っております。そして今後とも大いに学園を活気のあるものにしましょう。

# 摺 挨

畜産学科長  
農学博士 平 林 忠

昨秋畜産学科の若人が総力を上げて創設した畜友会は、その後順調な歩みを示しつつ、この度会誌を刊行することになった。その誌名を「ふじみの」と名付け、創刊第一号が誕生するのである。まことに芽出たいことと皆とともに祝福するものである。

千葉県茂原の「ふじみの」の地に畜産学科がこゝの声をあげて以来、十有余年の才月が過ぎ、その間に多くの畜産人を世に送り出した。今回、世田谷の本校へ移転併合されることとなったので、発祥の地名を会誌にとどめ想い出のよすがとしたのである。

世に刊行される同人雑誌はあまたある。それが俗に三号雑誌と呼ばれている。二、三号で消えてしまうから、かく名付けられたものらしい。筆者も三十余年前、同期生の会誌「欽光」を四号まで発行した経験をもっている。四号を刊行した時、よく継続しますねと大野図書館主事（現在の館長）にはめられた。なぜほめられたのかよくわからなかったので、理由を伺がったところ、同人雑誌は竜頭蛇尾で永続しないから三号雑誌と名付けられているのだと説明して下さった。四号まで続くのは珍しいことであり、四号まで続けばその後は必ず継続すると太鼓判をおされた。それにも拘らず四号で尻切れになってしまった苦い経験をもっている。同人雑誌の創刊を耳にするたびに苦い想い出が湧くのである。

今回、若人の総意によって創刊される「ふじみの」は前轍の苦汗をなめないように皆さんで育て、永続させたいものと念願するものである。この機関誌によって最大畜産人の縦横の連絡が密となれば畜産学科の強化発展は期して待つものがある。いさゝか蕪辞を述べて創刊の辞とする。

## 畜産学科発展の年

副委員長 黒 坂 明 弘

新入生の諸君、在校生として、諸君の入学を歓迎すると同時に、良き友達が出来たことを我々一同、心から喜んでおります。又、我々と諸君にとっても本年度は記念すべき年であると共に、多事多難な年であることを言わねばなりません。なぜなら、我々多年の、念願であったところの移転問題も解決し、分校、本校に分かれて勉学をしていた畜産学科も本校に於いて、一年から四年まで、共に勉学が出来る様になったことでもあります。これを機会に、我々は新入生の諸君と力を合せて、この畜産学科をより発展させるべく、又、移転後の問題も互いに、力を合せて、解決して行こうと張切っております。

農大畜産学科に於ける、我々が言えることは、日本農業に於いて、畜産が、年々発展しつつあり、又、重要な位置を、占めつつあることが、我々にも、身近に感じられ、考えさせられるところでもあります。そして、畜産が発展しつつあると言うことは、一方に於いて、今迄の畜産よりも、さらに、希望できる方向に、形態を変えつつあることを意味していると思う。と言うことは、今迄の求人状況、就職率の上にも表わっていて、社会は常に、新しい技術をもった技術者を、要望していることを、この方面から観察してもわかると思います。我々は、この要望に、答え得る様に努力すべきであらう。そして、成長しつつある日本畜産の発展は、農大の畜産学科が行うのだと言うファイトと自信をもって、進もうではありませんか。そして、諸君も自己のおかれている立場を、自覚して、これからの学生生活を、有意義に、過ごしてもらいたいと、念願している次第である。

## 新入生を迎えて

副委員長 高 州 康 宏

新入生の入学に際し我々在校生一同心から御祝ひ申し上げます。我々同輩は新入生諸君同様に希望に満ち溢れて二年前本校の門を叩いたのですが、郷里を離れての不安も付加され移転問題に絡む数々の難問で何一つ満足すべき事も無く、日の経過と共に、大望も薄れる反面不安が募るのみと成りました。所が先生各位及び先輩達の力添により移転問題も解決し、愈々実行の運びと成り今学期より新気一転して新入生と同じ志しを持って残期間を自分自身の確立の為に、強ては畜産科の為に努力して行こうと思っております。要するに過渡期に有るこの畜産学科を全学生が一体と成り本校発展の為に、入学当初の志しを忘れる事なく頑張つて、一層よりよい学園として育て行きたく思っています。学術追求の反面四年間の大学生活に於て余暇を充分活用させて、社会人として巣立つ折の人間形成の手段を選択し勉学に励む一方大学生活の有り方を各自が確立し、有意義なる大学生活を送つて行こうでは有りませんか。

## 牛の体質に関する血清学的研究

昭和三四年度優秀卒論賞

岩瀬伸夫



## 第一章 緒言

白井<sup>12)</sup>は始めての人の唾液、精液等の分泌液中に、その個体の血液型と同様な型物質(型質)が存在していることを発見し、その後これに関する多くの報告が他の人々によってなされた。これらの報告によると血液型物質は単に血液の中にのみ存在するものではなく、他の体液、臓器及び組織にも存在するものであることが明らかにされ、また吉田<sup>13)</sup>もこれらに関する実験を行い、一個体全体がその個体の血液型に属するものであることを認めた。一方これらの型物質の分泌量については、白井<sup>12)</sup>、Brahm & Schiff<sup>14)</sup>等は人唾液中のそれは各人によって著明な差のあることを認め、Schiff & Sasaki<sup>15)</sup> Sasaki<sup>16)</sup>

等は型的凝集阻止反応の強弱によって、人唾液を分泌型と非分泌型に分類し、また關本<sup>17)</sup>は分泌型と非分泌型の中間型が存在することも報告している。いづれにしても、これらに関する報告は極めて数多いが、こゝでは割愛することにしたい。

さて動物において主なる報告をみると次の様である。即ち白井<sup>12)</sup>は人の分泌液と同様に動物の分泌液中にも人の正常血液中の型的凝集素を吸収する物質が存在していることを認めた。即ち馬の精液、唾液及び唾液より分離せる粘素及び核蛋白等には人の $\alpha$ 及び $\beta$ 凝集素の反応を阻止するものがあると、馬の分泌液中にも明らかに人の血液型物質が存在していることを報告した。また Landsteiner<sup>18)</sup>は馬の唾液中のA物質を炭水化物様物質とし

て取り出したと報告し、Friedenreich<sup>19)</sup>

Hartman<sup>20)</sup>は唾液中にA型質の証明される個体と証明されない個体のあることを認め、山口<sup>21)</sup>もまたこれについて追試した結果、馬唾液中のA型質は人の場合と同様に分泌物(A<sup>+</sup>型)と非分泌型(A<sup>-</sup>型)に分けられることを明らかにした。また細田<sup>22)</sup>は馬唾液中にはA型質、B型質及びO物質が存在し、A型質においては抗-A凝集素を極めて吸収する個体と極めて弱く吸収する個体があることを認め、前者を分泌型(A<sup>+</sup>型)、後者を弱分泌型(O<sup>-</sup>型)に分類した。家兎では越野<sup>23)</sup>が唾液中にA型質が証明される分泌型(A<sup>+</sup>型)と証明されない非分泌型(A<sup>-</sup>型)の個体に分けられるとし、また細田<sup>24)</sup>もこれについて同様な結果を認めている。一方渡辺<sup>25)</sup>も

家兎においてこれらのことを認め、更に家兎の尿中にもA型質が証明される群とそうでない群に分けられ、また腎臓及び膀胱中のA型質を調査すると同一個体においては唾液に一致していると報告している。更にB型質についてみると尿中には殆んど個体に証明されるところと述べている。山羊唾液中の形質については佐藤<sup>26)</sup>、鈴木<sup>27)</sup>等の報告があるが、そのうち鈴木は山羊唾液中にはA型質、B型質及びO物質が証明され、更にA型質においては分泌型と非分泌型に分類せられるとしている。

一方綿羊についても鈴木<sup>28)</sup>は唾液中にA型質の証明されることを認め、更にそれは凝集阻止価の分布状態によって分泌型、非分泌型及び移行型に分けられると報告している。一方牛については鈴木<sup>29)</sup>は唾液中のA型質、B型質及びO物質を部分抗原の見地から調査した結果、すべての個体に各型質が分泌されていることを認めている。

ところが動物において、これらの報告の多くは殆んど唾液についての実験で他の分泌液についての報告は極めて少ない。そこで著者は牛の唾液及び陰液中のA型質、B型質及びO物質の分泌状態について調査を行ったので、その成績を報告する。

## 第二章

## 牛唾液中のA、B型質及びO物質

緒言でも述べたように鈴木によって牛唾液中の型質について詳細に報告されているが、著者もまた牛の体質に関する血清学的研究の第一段階として、まずこの点を追試実験を行った。

## (一) 実験材料及び方法

供試牛 千葉県長生郡一の宮町一帯に飼育されている Holstein 種四〇頭を使用した。  
抗血清 主として東京医科歯科大学法医学教室より提供して戴いたものを使用した。また一部本学畜産学研究室作製のものをも使用に供した。

反応用人血球 血液型の明確な人の静脈より 2% Citrate 生理的食塩水中に採血し、数回遠沈洗浄したものを1%浮遊液として使用した。

唾液 口腔を手指で開口し、流出せる唾液を速やかに採取した。更にこれを 2500<sup>mm</sup> 五分間遠心分離し、上清の部分を 100°C の温浴槽中で5分間煮沸した後、放冷し氷室に保存した(保存日数は最大一週間)。また使用に

あたっては、これを三倍に稀釈したものを原液として使用した。

吸収方法 三倍に稀釈した唾液を素液としてそれぞれ倍數に稀釈を行い、更にこれを一定度の抗体価を有する様に補正した抗血清を同量加え、よく振盪して恒温器(37°C)内、室内及び冷蔵庫内にそれぞれ一時間宛放置し充分に吸収したる後、ホールガラスにより凝集阻止価の程度を檢索した。

反応 三倍稀釈以上において凝集の阻止されるものを分泌型(A<sup>+</sup>型)及び阻止されないものを非分泌型(A<sup>-</sup>型)に分け、阻止価の程度は、最も強く阻止されるものを(一)、少々阻止されるものを(十)、阻止されざるものを(廿)で表し、それぞれの中間を(主)で示した。

## (二) 実験成績

(A) 抗-A、抗-B及び抗-O血清の吸収試験

牛唾液中のA、B型質及びO物質の存在を明らかにするため、牛唾液を以て抗-A、抗-B及び抗-O血清の吸収試験を行った。その代表的なものを示すと Table 1, 2及び3の如くである。

即ち Table 1 に示す No. 2, 4 及び 11 の唾液では反応が阻止され、No. 14, 22 及び 23 の唾液では反応が阻止されていないことがわかる。即ち反応の阻止されている唾液 (No. 2, 4 及び 11) 中には A 型質が分泌され、逆に阻止されていない唾液 (No. 14, 22 及び 23) 中には A 型質が分泌されていないことが明らかになった。従って牛唾液中の A 型質は、これが分泌されている分泌型 (A<sup>+</sup>型) の個体と分泌されていない非分泌型 (A<sup>-</sup>型) の個体に分けることができる。

また B 型質は Table 2 に示すが如く、A 型質の場合と同様に、反応の阻止される個体と阻止されない個体とがあり、牛唾液中の B 型質はこれが分泌されている分泌型 (B<sup>+</sup>型) と分泌されていない非分泌型 (B<sup>-</sup>型) の個体に分けられる。

更に O 物質については Table 3 に示す様に、O 物質においても、これが分泌されている個体、所謂分泌型 (O<sup>+</sup>型) と分泌されていない非分泌型 (O<sup>-</sup>型) の個体に分けられる。

(B) 唾液の各型の出現頻度  
 これまでに牛唾液中の各型質の分泌の有無によって、A 型質においては A<sup>+</sup>型と A<sup>-</sup>型、

Table 4 Frequency of secretor and non-secretor type of A, B and blood substances in cattle saliva

Blood substances	Secretor type	Non-secretor type	Total
A	90.0%(36)	10.0(4)	100.0(40)
B	65.0%(26)	35.0(14)	100.0(40)
O	65.0%(26)	35.0(14)	100.0(40)

( ) head

Table 5 Frequency of (combination) for secretor and non-secretor type of A, B and Oblood substances in Cattle saliva

Combination	Frequency	
	%	head
A <sup>+</sup> ·B <sup>+</sup> ·O <sup>+</sup>	37.5%	15 head
A <sup>+</sup> ·B <sup>+</sup> ·O <sup>-</sup>	22.5%	9
A <sup>+</sup> ·B <sup>-</sup> ·O <sup>+</sup>	22.5%	9
A <sup>+</sup> ·B <sup>-</sup> ·O <sup>-</sup>	7.5%	3
A <sup>-</sup> ·B <sup>-</sup> ·O <sup>+</sup>	5.0%	2
A <sup>-</sup> ·B <sup>+</sup> ·O <sup>-</sup>	5.0%	2
A <sup>-</sup> ·B <sup>+</sup> ·O <sup>+</sup>	—	—
A <sup>-</sup> ·B <sup>-</sup> ·O <sup>-</sup>	—	—
Total	100.0	40

Table 1 Absorption-test for anti-A sera with Cattle saliva

No.	Dilution of saliva									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
2	—	—	—	+	++	++	++	++	++	++
4	—	—	±	+	++	++	++	++	++	++
11	—	—	—	—	+	+	++	++	++	++
14	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
22	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
23	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++

Table 2 Absorptiontest for anti-B sera with Cattle saliva

No.	Dilution of saliva									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
1	—	—	+	+	++	++	++	++	++	++
5	—	—	—	+	++	++	++	++	++	++
10	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
11	—	—	—	—	+	++	++	++	++	++
13	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
19	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++

Table 3 Absorption for anti-O sera with Cattle saliva

No.	Dilution of saliva									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
2	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
5	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
13	—	—	—	—	—	±	+	++	++	++
14	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
17	—	—	—	±	±	+	++	++	++	++
27	+	+	+	+	++	++	++	++	++	++

Table 1 Absorption-test for anti-A sera with Cervical mucus of cattle

No.	Dilution of cervical mucus									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
4	-	-	-	-	-	-	-	+	++	+++
6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
9	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
21	-	-	-	-	-	-	±	+	+	++
33	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
64	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++

Table 2 Absorption-test for anti-B, sera with Cervical mucus of cattle

No.	Dilution of cervical mucus									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
10	-	-	-	-	-	-	-	+	+	++
69	-	-	-	-	-	±	+	++	++	++
76	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
85	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
92	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++

Table 3 Absorption-test for anti-O sera with cervical mucus of cattle

No.	Dilution of cervical mucus									
	×3	6	12	24	48	96	192	384	768	1536
1	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+
7	-	-	-	-	-	-	±	+	++	++
11	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
69	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
73	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
76	-	-	+	+	+	+	++	++	++	++

B型質においてはB<sup>+</sup>型とB<sup>-</sup>型、及びO物質  
においてはO<sup>+</sup>型とO<sup>-</sup>型に分けられたが、次  
にこれら各型の出現頻度の調査を行った結  
果、Table 4の如く成績を得た。

即ち調査頭数四〇頭中の出現頻度をみる  
と、A<sup>+</sup>型、B<sup>+</sup>型及びO<sup>+</sup>型はそれぞれA<sup>-</sup>型、  
B<sup>-</sup>型及びO<sup>-</sup>型に比し高い値を示す。即ちA<sup>-</sup>、  
B<sup>-</sup>型質及びO<sup>-</sup>物質は共に分泌型の出現頻度が  
大であることが示される。

(C) 各型の組合せによる出現頻度  
次に各型の組合せによる出現頻度を40頭に  
ついでみるとTable 5の如くである。

即ちこの表からA<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型の組合せ、  
即ち各型質の分泌型同志の個体が三七・五%  
(一五頭)で最も高い値を示し、一方A<sup>-</sup>、  
B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型及びA<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>-</sup>型の組合せ個体  
の出現はみられなかった。

また唾液中の各型質の分泌量は、A<sup>+</sup>型が  
最も多く、次いでO<sup>+</sup>型及びB<sup>-</sup>型の順にあ  
った(表略)。

(D) 小括

牛の体質に関する血清学的研究の一環とし  
て、手の唾液中のA型質、B型質及びO物質  
の分泌の有無について実験を行い次の様な成  
績を得た。

(一) 牛唾液中にはA、B型質及びO物質  
がそれぞれ分泌されている個体と分泌されて  
いない個体、即ちA型質では分泌型(A<sup>+</sup>型)  
と非分泌型(A<sup>-</sup>型)、B型質では分泌型(B<sup>+</sup>  
型)と非分泌型(B<sup>-</sup>型)、O物質では分泌  
型(O<sup>+</sup>型)と非分泌型(O<sup>-</sup>型)とがある。

(二) これらの出現頻度は四〇頭中、A<sup>+</sup>  
型、B<sup>+</sup>型及びO<sup>+</sup>型はA<sup>-</sup>型、B<sup>-</sup>型及びO<sup>-</sup>  
型に比較していずれも高い値を示す。即ち各  
型質を通して分泌型の出現頻度が大きい。

(三) 各型の組合せによる出現頻度は四〇  
頭中A<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型の組合せが最も大で、A<sup>-</sup>  
B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型及びA<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>-</sup>型においては出現  
をみなかった。

(四) 唾液中の各型質の分泌量はA<sup>+</sup>型が  
最も多く、次いでO<sup>+</sup>型及びB<sup>-</sup>型の順であ  
った。

第三章

牛の子宮頸管粘液中のA、B型質及びO物  
質

第一章において牛の唾液中の各型質につい  
て記述したが、次に牛の子宮頸管粘液中の  
A、B型質及びO物質についても同様な実験  
を行い次の様な成績を得た。

1 実験材料及び方法

供試牛 千葉県長生郡一の宮一帯に飼育さ  
れているHolstein種七四頭を使用した。  
子宮頸管粘液 陰鏡を用いて陰部を開口し、  
陰垢採取器を以て採取し、これを2500rpm  
五分間遠心分離したる後、上清を100°Cの  
温浴槽中で三〇分間煮沸を行い、更にこれを  
放冷して使用するまで氷室に保存した(保存  
日数は最大一週間)。なお使用にあたっては  
これを三倍に稀釈したものを原液として使用  
した。

その他については唾液の場合と同様であ  
る。

2 実験成績

(A) 抗-A、抗-B及び抗-O血清の吸  
収試験

牛の子宮頸管粘液中のA、B型質及びO物  
質の存在の有無について知るため、抗-A、  
抗-B及び抗-O血清の吸収試験を行な  
った。その成績の代表的なものを示すとTable  
1.2及び3の如くである。

即ちTable 1において、子宮頸管粘液を  
以て抗-A凝集素の吸収試験を行うと、No.

4. 6及び21において反応が阻止されているにもかかわらず、No. 9, No. 33及び64では反応が阻止されない。即ち反応の阻止されるNo. 4, 5及び20の子宮頸管粘液中には抗-A凝集素に反応するA型質が分泌され、逆にNo. 9, No. 33及び64の子宮頸管粘液中にはA型質が分泌されていないことを意味するものである。よって牛の子宮頸管粘液中のA型質は、これが分泌されている個体、即ち分泌型(A<sup>+</sup>型)とそうでない非分泌型(A<sup>-</sup>型)の個体に分けることができる。

一方B型質についてはTable 2に示すが如く、A型質と同様に反応の阻止されるものと、阻止されざるもの、個体があり、これらのことからして牛の子宮頸管粘液中のB型質も、これが分泌されている分泌型(B<sup>+</sup>型)とそうでない非分泌型(B<sup>-</sup>型)の個体に分けることができる。

またO物質についてもTable 3に示す様に阻止される個体と阻止されない個体に分けられることからして、これも明らかに分泌型(O<sup>+</sup>型)と非分泌型(O<sup>-</sup>型)の個体に分類することができる。

(B) 子宮頸管粘液の各型の出現頻度  
これまでに子宮頸管粘液中の各型質につい

Table 4 Frequency of secretor and non-secretor type of A, B and O blood substances in cervical mucus of cattle

Blood substances	Secretor type	non-secretor type	Total
A	94.6%(70)	5.4(4)	100.0(74)
B	91.9%(68)	8.1(6)	100.0(74)
O	82.4%(61)	17.6(13)	100.0(74)

( ) head

Table 5 Frequency of Combination for secretor and non-secretor type of A, B and O blood substances in Cervical mucus of cattle

Combination	Frequency	
A <sup>+</sup> B <sup>+</sup> O <sup>+</sup>	73.0%	54 head
A <sup>+</sup> B <sup>+</sup> O <sup>-</sup>	13.5	10
A <sup>+</sup> B <sup>-</sup> O <sup>+</sup>	6.7	5
A <sup>-</sup> B <sup>+</sup> O <sup>+</sup>	2.7	2
A <sup>-</sup> B <sup>+</sup> O <sup>-</sup>	2.7	2
A <sup>+</sup> B <sup>-</sup> O <sup>-</sup>	1.4	1
A <sup>-</sup> B <sup>-</sup> O <sup>+</sup>	—	—
A <sup>-</sup> B <sup>-</sup> O <sup>-</sup>	—	—
Total	100.0	74

て明らかにした。即ちA型質においてはA<sup>+</sup>型とA<sup>-</sup>型、B型質についてはB<sup>+</sup>型とB<sup>-</sup>型、O物質についてはO<sup>+</sup>型とO<sup>-</sup>型に分類される。そこでこれらの各型の出現頻度を調査した結果、Table 4の如くである。

即ち調査頭数七四頭についてA、B型質及びO物質はそれぞれA<sup>+</sup>型、B<sup>+</sup>型及びO<sup>+</sup>型がA<sup>-</sup>型、B<sup>-</sup>型及びO<sup>-</sup>型よりいずれも出現頻度が高い。

(C) 各型の組合せによる出現頻度

次に子宮頸管粘液の各型の組合せによる出現頻度をみるとTable 5の如くである。

調査数七四頭について各型の組合せによる出現頻度をみるとA<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型が極めて多く、A<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>+</sup>型及びA<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>-</sup>型の組合せにおける出現はみなかった。

また子宮頸管粘液中の型質の分泌量は各型質を通して極めて多く分泌されている傾向がみられた(表略)。

(D) 小括

牛の子宮頸管粘液中のA、B型質及びO物質の分泌について明らかにするため実験を行なった。その結果を得た。

(一) 牛の子宮頸管粘液中にはA、B型質及びO物質が、分泌されている個体と、分泌

されていない個体に分けることができる。即ちA型質については分泌型(A<sup>+</sup>型)と非分泌型(A<sup>-</sup>型)、B型質については分泌型(B<sup>+</sup>型)と非分泌型(B<sup>-</sup>型)、O物質については分泌型(O<sup>+</sup>型)と非分泌型(O<sup>-</sup>型)に分けられる。

(二) これらの出現頻度は七四頭中各型を通して分泌型、即ちA<sup>+</sup>型、B<sup>+</sup>型及びO<sup>+</sup>型が極めて高い値を示した。

(三) 各型の組合せによる出現頻度は七四頭において、A<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型が最も高く、またA<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>-</sup>型及びA<sup>-</sup>B<sup>-</sup>O<sup>-</sup>型の出現はみられなかった。

(四) 子宮頸管粘液中の各型質の分泌量はともに極めて多く分泌されている傾向がある。

## 第四章

牛の体質に関する血清学的研究において

まず唾液及び子宮頸管粘液中のA、B型質及びO物質の分泌状況を検索した結果、次の様な成績を得た。

(一) 牛の唾液及び子宮頸管粘液中にはA、B型質及びO物質が分泌されており、更にA

型質を分泌している個体(A<sup>+</sup>型)と分泌していない非分泌型の個体(A<sup>-</sup>型)、B型質を分泌している分泌型の個体(B<sup>+</sup>型)と分泌していない非分泌型の個体(B<sup>-</sup>型)及びO物質を分泌している個体、即ち分泌型(O<sup>+</sup>型)と分泌していない非分泌型(O<sup>-</sup>型)に分類することができる。

(二) 牛の唾液及び子宮頸管粘液中の各型質の出現頻度は、唾液において四〇頭のHolstein種中、A<sup>+</sup>型九〇・〇%(三六頭) A<sup>-</sup>型一〇・〇%(四)、B<sup>+</sup>型六五・〇%(二六)、B<sup>-</sup>型三五・〇%(一四)、O<sup>+</sup>型六五・〇%(二六)、O<sup>-</sup>型三五・〇%(一四)子宮頸管粘液では七四頭中、A<sup>+</sup>型九四・六%(七〇頭)、A<sup>-</sup>型五・四%(四)、B<sup>+</sup>型九一・九%(六八)、B<sup>-</sup>型八・一%(六)、O<sup>+</sup>型八二・四%(六一)、O<sup>-</sup>型一七・六%(一三)であった。

(三) 牛の唾液及び子宮頸管粘液の各型の組合せの出現頻度は、唾液はA<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型三七・五%(一五頭)、子宮頸管粘液はA<sup>+</sup>B<sup>+</sup>O<sup>+</sup>型七三・〇%(五四頭)でそれぞれ最高値を示した。

(四) 唾液及び子宮頸管粘液中の各型質の分泌量は唾液よりも子宮頸管粘液の方が大

ある様に思われる。  
 (五) 同一個体内における唾液及び子宮頸管粘液の各型の分泌は相互的關係はなる。

文献

一) 白井三郎: 北海道医学雑誌 3(2): 25, 1924  
 二) 白井三郎: 北海道医学雑誌 2407: 457, 1925  
 三) 白井三郎: 東京医事新誌 2409: 457, 1925  
 四) 吉田寛一: 社会医学雑誌 495: 331, 1928  
 五) Brahm, B. & saft H: Klin. Wochenschr., 5(32): 1455, 1926  
 六) Brahm, & Schiff, H: Klin. Woche-nschr., 9(33): 1523, 1929  
 七) Schiff, F. & Sasahi, H: z. f. Immunit., 77: 129, 1932  
 八) Schiff, F. & Sasaki, H: Klin. Wochenschr., 11(34): 1426-1428, 1932  
 九) Sasaki, H: z. f. Immunt., 77: 101, 1932  
 十) 関本秀治: 長崎医学雑誌 18(5): 526, 1940  
 一一) Landsteiner: Science 76: 351, 1932  
 一二) Fiedenreich u. Hartman: z. Imm.-Forsch., 92: 141, 1938  
 一三) 山口克己: 東京医学会雑誌 57: 147: 1943  
 一四) 細田達雄: 馬事研究所報告 2: 17-27, 1948  
 一五) 越野達郎: 十全会雑誌 44: 2180-2209, 1939  
 一六) 細田達雄: 日本畜産学会報 1956 27: 2,  
 一七) 渡辺信一: 新潟医学会雑誌 ~604, 1959 73: 535  
 一八) 佐藤四郎: 千葉医学会雑誌 ~447, 1959 29: 434  
 一九) 鈴木正三: 日本畜産学会報 84, 1957 28: 81~  
 二〇) 鈴木正三: 日本畜産学会報 ~293, 1958 29: 290  
 二一) 鈴木正三: 農学集報 4: 104-112, 1958

研究室速報

家兔筋肉中の蛋白質及びアミノ酸分析

理化学研究所 吉田大一

家兔に首輪を填めて、喰糞を阻止する時、約三〇日で死亡すると平林・平山両先生<sup>(1)</sup>は述べている。著者は、喰糞一〇日目の家

兔を屠殺解体し、その前肢筋の蛋白及びアミノ酸を分析し、その結果を得たので報告する。

材料と方法  
 (一) 供試動物

家兔は日本白色種(♀四羽、♂四羽)を用い、対照区、試験区、共に雌雄一対とし、四区に分け、対照区、A区は、おからの単味飼料とし、一日一羽当り五〇〇gを与え、更にB区は、配合ビタミン剤、C区は、必須アミノ酸を与え試験区には、いずれも首かせをはめて、喰糞を阻止し、一〇日間飼育し屠放殺血を行い、供試肉を採取した。なお必須ア

ミノ酸配合率は第一表の如し。  
 (二) 分析試料  
 家兔の右前肢筋を取り、Cにて、時間冷凍脱水を行い乾燥肉として、各区〇・五g宛秤量し、粗蛋白質は、ケルダール法を用い、アミノ酸定性は、6N HCl 加水分解したものをを用いた。なお供試肉の pH は 6.5, 7 であ

第一表

アミノ酸	配合量 g
L-Try	0.4
L-Phe	0.5
L-Lys	0.7
L-Thr	0.5
L-Meth	0.1
L-Leu	0.5
L-Val	0.6
L-His	0.3
L-Arg	0.2

第二表 1g中

区別	性	粗蛋白質 mg
対照区	♀	728, 1250
	♂	635, 7996
A区	♀	714, 5980
	♂	723, 2504
B区	♀	685, 0000
	♂	688, 2500
C区	♀	728, 8750
	♂	759, 3751

3) 粗蛋白質の定量

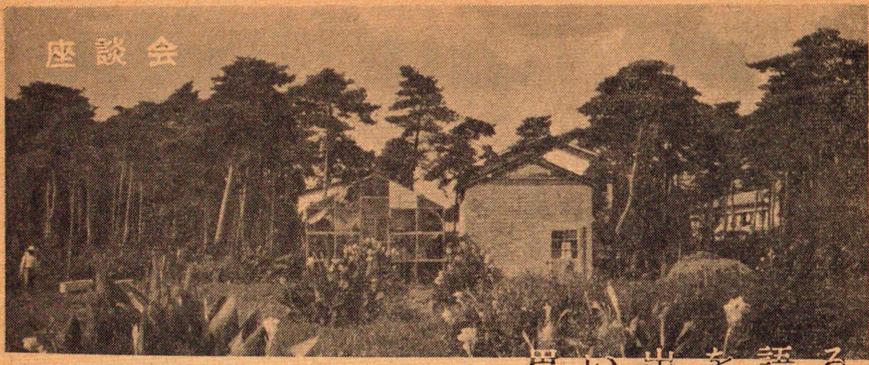
ミクロケルダール分解装置を使用  
 試薬 N/10 規定 H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>  
 N/10 規定 NaOH  
 40% NaOH  
 指示薬 コンゴローレンス  
 肉〇・五g宛、分解フラスコに採り、濃 H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> 10cc 及びカタライゼ (K<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>: CuSO<sub>4</sub> 11.9:1) を入れ分解後 250cc とし、その肉より 10cc を取り蒸留後 N/10 NaOH で滴定した。  
 (4) HCl 加水分解  
 Formal 滴定法により、アミノ態窒素量の定量  
 試薬 N/10 規定 NaOH  
 30% ホルマリン溶液  
 指示薬 フェノール フタレイン

第三表 1N, 2.5N, 4N, 6N, 各規定抽出によるアミノ酸の定性反応

	Asp	Seg	Glu	Gly	Ala	Val	Pro	Leu	Try	Lys	Phe	Arg	His
1N	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
2.5N	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
4N	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
6N	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

対照区試験区は変化なし

HCl 加水分解物を脱塩して、25cc としその肉より、2cc 取り、N/10 NaOH で滴定した。  
 (5) Paper Chromatography<sup>(5)(6)</sup>  
 Formal 滴定に用いた供試液の残りを、イ



思い出を語る

出席者	卒業年度	勤務先
夫幸郎	昭和7年	千葉県庁農業技術課
泰範太	昭和26年	キューピー株式会社
川田橋瀬	昭和32年	須田養鶏場長
砂青須	昭和33年	日本ホルスタイン登録協会
高岩茅戸	昭和34年	養鶏業
	昭和34年	養豚業
	昭和34年	養鶏業

司会 西田 修 (畜四)

ここに畜産科卒業生の先輩諸氏をお招きし、座談会を開いた。想い出や畜産学科の発展のために、我々に対する御希望をお聞きし、非常に有益だった。我々としては、もっと多方面からの出席者を希望していたが、都合により、養鶏に片寄った事をまずおわびする。

司会 お忙がしいところ、御苦勞様でした。今日は皆さんの学生時代の思い出や、畜産に対して日頃、感じておられる点をお話し、て載せたいと思います。

最初に御紹介させていただきますが……

砂川 昭和七年の卒業です。農学科で、衣川先生について鶏をやっておりました。予科の時ホッケをやっておりました、思い出は多い。卒業してから、最初植物分類を無中でおぼえさせられた。研究室で、飼料作物をやっていたからです。十二年から満州へ飼料増産の為に渡り、ルーサンを担当したり、中央の試験所で働いていた。帰国後、二十一年から千葉県庁農地農林部に入り、専門技術員として十一年間、養鶏や養豚を担当しています。昨年より畜産学科の経営学の講師をしています。

高橋 理大から転校しまして、農大の学生として二年間通っていました。三十二年に卒業し日本ホルスタイン協会に入社しました。

岩瀬 武蔵野で養鶏をしております。動機は、当時自治会委員長などとしてだったので、先生方に好意的でなかったんです。自立するんだと思ひ、神奈川中央養鶏場での実習をやり去年から自分の経営



オン交換樹脂カラムを通して、1N. 2.5N, 4N, 6N, HCl に抽出したものを、脱塩して、供試液とした。展開は一次元法を行った。

(a) ロ紙 東洋ロ紙 No.50(2×40cm)  
=4:1:2  
(b) 展開剤 ロ・ブタノール：酢酸：水  
(c) 展開方法 一フラクシモン 10cc(1) を各々規定液について、取って脱塩させ、0.5ccとしたものを、ロ紙の先端より5cmの所に、0.03cc スポットし、30cm展開した。

(p) 発色剤及び発色方法  
Paper を風乾後、0.2%ニンヒドリン・ローブタノール水飽和液を、スプレーして、90~110°Cで五分間発色を行った。同時にアミノ酸のテーブルを作り、発色(ニンヒドリン)とフレイト・メターを使用して、固定した。

結果と考察

粗蛋白量は、表二のごとく、特に差異は認められなかった。アミノ態窒素においても第4表のごとくであったが、然しC区のみ、やや多くなっている。

以上の事より見るに、喰糞阻止したる時一

(第四表)

対照区を100とする(アミノ態窒素量)

対照区	A区	B区	C区
100%	101%	100%	110%

○日にては、対照区、試験区、の兎間に大きな差異は認められなかった。

この報告にあたり、師稲葉先生の御指導のもとで、実験し、四月の七日、八日の畜産学会に発表された所を参考にさせていただきます。

文献

- 一) 平林忠・平山常雄一九六〇東京農業大学農学集報五四六二
- 二) 東京大学農芸化学教室 一九五七 実験農芸化学(下) P六二六
- 三) 東京大学農芸化学教室 一九五七 実験農芸化学(上) P一〇六
- 四) 東京大学農芸化学教室 一九五七 実験農芸化学(上) P一一〇
- 五) 紫田村治 ベーパークロマトグラフ法の実際 P八二
- 六) 本田雅健 垣花秀武 吉野諭吉共編 イオン交換樹脂 P一九〇~二一五



日本獣医畜産連盟設立 準備進む

麻布獣医学大学を中心に日本獣医畜産連盟の設立が準備されている。

発起大学は他に日大獣医畜産科、日本獣医学大学、東京農工大学で本校からも合同会

議に出で検討を加えた。内容は「獣医畜産界の発展」を綱領として全国大学に呼びかけ様とのこと。すべての問題を波及していくと、政治結社の弊害気がただよう。

その点で政治的運動の禁止されている大学における位置づけが問題の第一点。当日迄の経過は、最初三校で準備を進め、後本校と農工大を含めた五大学発起人会で話し合っており出してもどってしました。またたく畜友会の発足当時の本校と分校とのトラブルと同じ書きであるのでちょっと滑稽。本校としては発起校としては時期尚早の立場をとり、辞退し、四大学に一任、早期実現を願うこととした。

に入りました。設備はどこにも負けないつもりですが

茅島 岩瀬さんの近くで、養豚経営をしておりませう。

須田 学生は少なかつたし、よくめだつたと思う。四年の一年間は、仕事にせまられて、あまり学校へは行きませんでした。一原種鶏三〇〇羽、ふ卵器三台で経営しておりますが、卒業後五年、精根をこめてやってきましたが、ちょっとこの所、壁にぶつかってしまっています。

私達のクラスメートで、今もグラス会をつくって親交を深めています。

青田 昭和二十六年の専門部最後の卒業で、兵舎のあとの殺風景なところで生活を送ったものです。獣医になりましたが、生理学を勉強し、卒業後キュービーに入社したんです。当時はマヨネーズなど食べたこともなかつた時で、主人にすすめられるまゝ入ってしまった様な次第で府中の農場で営業主任をしてから現在では本社で営業を担当しています。後輩も六人入社した。

戸井 小学校のとき体をこわしてから、勉強の方も苦労しました。近くに住んでましたので、一年間聴講生として入り、先生方の厚



ね。二八年の十月末です。牛車に芋や大根を積みこんで青山ほとりを踊りながら市中行進、景気だけはよかつたですね。

砂川 昔は、あんまりそんな事はしなかつた。記憶にあるのでは芋をふかして生産物の展示位の程度ですね。

話はちがいますが、販売実習が当時ありまして、まだ常盤松にあった頃ですから用賀農場から馬車一台、野菜を積みこんで、六―七人で青山の大邸宅のベルを鳴らしたものです。もう売ってしまえばよかつたんで、目方などかまわず、つかみ取りでおいできた。安くて評判はよかつたし当時の四大新聞によく名物として出た。

須田 そのなごりでしょうか、収穫祭に物をばらまくのは。

砂川 水田実習が一番いやでした。ひるに吸いつかれてね。

意で四年間過ごすことになつたわけです。養鶏を始め初志貫徹というところ。今後も少しづつ勉強していきたいと思つております。



### 木村先生のこと

学生会時代の思い出話などをお聴かせ下さい。

青田 まったく殺風景な中で、ボウ然とした生活を過ごしてしまいましたが、一番の思い出は寮の食料難です。町長に働きかけて外米十六俵の特別配給などしてもらつたりした。

木村先生と農村廻りをしたことも楽しい思い出です。白髪のおもかげは今もええません。

須田 東京へ出てくるのは二年二回位ですが、確かに茂原でなければ味わえないものがある。先輩後輩の關係、先生との間にも、親しさがあふれていたし、今でも時折、ふいに茂原へ尋ねて行くと、ふいに行のどうして連絡しないんかといつてしまわれる。

司会 戸井さんは本学科始まって以来の紅一点ということをお聞かしていますが、当時の心境

青田 実習はあまり出なかつたが、先生等飯田さんとか鈴木さんと呼んで親しくやつたものです。流石に木村先生だけは先生と呼んだ。非常に家庭的な中に卒業した。

司会 そう言えば今でも鈴木先生は正ちゃんで通つてますよ(笑)

戸井 研究室の近くに学生と寝泊りしてましたし、その点で先生との接触は多かつたんですね。

須田 私のクラスは二八名、二年が一七人三年が九人、四年が十一人といった時代ですものね。先輩もよかつたし、養鶏研究所で伊東大輔先生に教わつて教室外の親交は多かつたですね。

司会 理大と比べてどうですか。



高橋 理大は公式をいじりまわしてるといった所で、最初、平林先生に茂原へ案内された時はおどろいた。

草深い茂原の地の学園をくゞると、勇壮な顔、顔、自分についていけるか心配でした。しかし、二年間の生活で、やはり農大の真の気風、逆境にも負けず立ち上る力強さを学

はいかがでしたか。

戸井 鈴木先生が私の高校に講師で来ておられました。そんな關係もあつて農大のことはよく話にきいておりました。

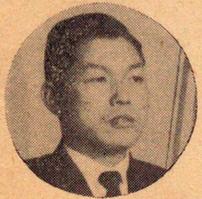


茅島 案外おとな

### 青山〱名物のかずかず

司会、収穫祭も今年は七〇周年ですが、その今昔話でも聞かせて下さい。

砂川 収穫祭はシーズン中で殆んど出てなかつた状況です。



青田 茂原はいつも本校に來て一位だつた。ストームは半強制的にやらされたし、土人の真似やフラダンスをやって張切つたものです。人数が少なかつたのでよくまとまり団結心はありましたね。

須田 私達が入学してから、茂原でやる様

びました。ファイトの基だと思ひます。ちょっと野生的なところがありません。

青田 入学して最初の一週間は応援歌の練習、普段の生活は講義始めにサイレンがなる訳でもないし、寝こんだまゝ、一人が掲示板を見に行くんです。

今日は休講だとなつた時はもう寝こんでしまふ。

砂川 今の学生はまじめに講義に出てくれます。

司会 色々悩んだ思ひ出もあることと思ひますが。

試験は今よりつらかつたですね。

砂川 畜種学の八〇〇ページもあるのを一冊全部読んで全然わからない。何度か捨てたと思ひました。先輩いわく、全然やらずに試験場のぞめば、誰か教えてくれる。へたに勉強するから、できないんだ(笑)

まったくパンカラ風潮でした。今よりひどかつた。成績のよい一〇人位はよく勉強しましたよ。

青田 よく勉強する人とならない人と完全に二つに分かれていましたね。

木村先生には苦労しました。

戸井 佐々木清綱先生や、鈴木先生は専門

語位は英語で書けなければ絶対だめだっていうんで、苦勞しました。

砂川 あんまり茂原の学生は苦しんでないみたいですね。

高橋 佐々木先生が茂原へ来られて、一番なげたのは一般教養が足りないということ語学と数学の必要を切実に言っておりました。須田 一般教養の面では茂原はへんびですが、畜産全体からみると茂原をはなれたことには疑問ですね。今後本校でどんな環境が与えられるか分かりませんが、充分考慮がないと、茂原の方がよかったということになりかねませんね。

青田 技術者として実際体験が大切であるし、家畜を取り扱うということは本校において相当不便になるでしょう。本人の自覚が必要ですね。

### 眞の板術者として

司会 職場で望まれているものは。青田 一番苦しかったのは、教的觀念の弱さのことでした。試験みたいにカンニング式にはできないし、営利の点、簿記など、直接必要です。私達の營業も農家經濟を通しての運営ですし、指導力など相当必要ですね。



須田 父のあとを継いでやっただけですが一般的に言えることは、農大が相当、腕の方に重点をおいていることを思えば、眞の技術者になることです。多に研究機関や先輩を利用して、実際に即した勉強をして欲しい。今私は飼養管理技術という面で相当悩まされています。ですから全然畜産に関係のない人で入学した人は特に学生時代に動物にふれることが眞の技術者としての資格だと思う。

岩瀬 養鶏経営も相当企業化されるでしょう。神奈川の中央養鶏場での生活が一番身につけています。簿記も習い始めました。

司会 砂川先生は農村關係を対象に働らいておられますが、農村に入ることについて学生に要望する点はございますか。

砂川 行政官庁では農政の二大支柱として果実と畜産をとりあげており、畜産はブームですから、生産体制も相当企業化されています。飼養管理技術は是非習得して欲しい。農業技術は低いので、ちょっとやれば一定水準に達せられる。これだからこそあまり浅いと

思う。畜産経営にしても、宇大の西山太平氏や日大の島津氏のにも、もっと深さが欲しいし、この意味から学生諸君に大いに追求してもらいたい。経営にしろ研究にしろ外国の文献は必要だし、一年に一冊は最低どんな原書でも読むべきですね。

戸井 実際自営すると、労働基準法が云々など言われてられません。

砂川 今後は相当機械生産化してくるでしょう。私の学生時代に習得した技術などより以上の高度の技術が普及していますからね。経験ばかりにたよった技術体系から機械化がぐっと導入されると思います。

須田 プリーディングだけは、機械化は無理でしょう。機械化してしまつては到底よい種の維持はできない。

砂川 技術の他にも資金は相当問題ですね。戸井 農村へ帰るといことは本学々生の使命ではないでしょうか。指導者の立場に立つ人がずいぶん少ないんです。

茅島 付近の人の方が技術は相当進んでいます。

司会 色々伺いたいことがたくさんありますが時間が遅くなりましたので終りたいと思います。



右手に仕事左手に酒をかかえ

親分と呼ばれる男

農場長

石原大右エ門

先生は明治三十二年一月六日に飛騨高山(岐阜県吉城郡国府村)に生る。農大の大先輩である先生は、大正八年に農大に入学して予科一年の時、畜産に興味があった先生は畜産研究会を作る為に発起人の一人として活躍されました。農大入学前、中学を卒業した先生は小学校の代用教員をしたのが就職の始めであり、その後、銀行に勤めておりました。又その頃青年団々長をしていた先生は、当時若い青年が結核で倒れていくので、これは駄目だという訳で、これは食生活の改善にあるのだということを思い、以前から畜産が必要だと考えていた先生はそれから多事多難の道を程で、農大に入学した次第である。先生は農大在学中前記の畜

産研究会の幹事をやり、研究会の会長である月田藤三郎先生(農林省試験場長)のもとで色々世話になり、その間に、乳牛、鶏、兎等の研究をして、卒業論文は兎で書いたが、どうしても兎に於て、失配が重なるので、後に鶏に転向し、以来鶏一本に生きている先生である。大正十三年に農大を卒業し農林省試験場(千葉)を皮切りに、大宮種畜牧場(元の種鶏場)、愛媛県庁、岡山県庁、秋田県庁、新潟県庁を程で、昭和二十九年七月に農大の方に来ることになったわけであるが、それには古巣である農大に来て、両学一致(学問と実技)を、もっととうとしてやることを考えていたからである。しかし



(畜四、木村記)

# 「樞山」化する郷土

二年 竺原秀成

姫路より汽車で二時間、山中鹿之助で知られた上月を過ぎ岡山県へ入ると一番始めの駅、美作土居である。こゝより更にバスで三十分、福山は我郷土である。しかし山村でありながらも山は禿、水田は老朽化し平均収量も十アール当り四五〇キログラム前後である。農家の平均耕作面積七〇アール。別に換金作物もタバコ位なものであり、したがって所得額も想像されるであらう。

しかしながらこゝの僻地山村にも高成長をつづける日本資本主義経済の不均衡発展の波にあらわれ神武景氣からつゞく都会の好景氣に魅せられ我々のクラスに於ても中卒ですぐ自営農業にとり組んだのはたゞ一人であった。その他進学の内、農業高校に行ったものが半数近くいたにもかゝらず卒業すると農業には着手しようとしな

い。全くこの矛盾が今日の現状なのである。  
つまり農村は「樞山」化するばかりで残るは老人ばかりである。現在池田内閣による所得均衡政策に依り農政がうち出されているが、十年後には農業就業人口を現在の四割程度にするといういわゆる「農業人口六割削減政策」で農民に異常のショックをもってうけ

とられたが、この農業人口を削減するというのは他の第二、三次産業の発展に伴って人員不足をきたすであろうその時に農業部門からの労働力の流出によっていわゆる国民所得倍增計画が達成されるというのである。

農林省は昨年十月農業基本法案なるものを公表したがこれにより、より適確に池田内閣の農政がわかると思う。その基本方向は首相の発言や談話によってつかめるであらう。一言にいえば、国民所得倍增政策の一環として農政編成農業生産構造の再編成を中心に、農家を大幅に非農業部門に吸収しつゝそれによって、より規模の大なる、農業経営を育成するということに生産構造編成の眼目がおかれていと思う。自立農業経営の育成を根本的なねらいとする農政は、裏からみればとりもなおさず、自立経営となりうる条件をもたない農家に対しては冷酷な農政となる公算が大きいといわなければならない。貧農切すて論の火口は何も今始まったことではないらしく

「このまゝでは、農業はゆきずまる、何んとかしななければ……」

こういう世論は二八年・九年の凶作、三十年の河野農相の時以来全国的に盛り上っていたようである。

農林省がFAO(国連食糧農業機構)の提唱で世界の各国が参加して行なわれた一九六〇年世界農林業センサスの発表では日本の農家戸数は六百五万六千戸で五年前に比して減少率〇・三%である。人口の方は三千四百四十七万人で五年前に比して減少率は五・九%である。これからみると農家戸数のゆるやかな減少と考え合せると、農家人口の減少は農家戸数の減少によるものでなく、一戸当りの人数の減少によるものと思われる。この減少したものをつきつめて考えてみると、一見動いていないような農村の中に将来はその景観を一変せすにはおかないような胎動があるのに気付く。農村人口に関する統計資料は、新しく激しい動きがはかならぬ若い世代に生じていることを明示している。その端的なものが中学校、大学卒業生の内農業につくものが毎年減少していることである。

私の郷土をみても毎年中学卒業生の何パーセントが農業についているか、おそらく片手の五本の指に余るのでは無いか、現に私の友達が今春定時制農校を卒業するが昨年までは「おれは百姓をやるんだ」と云っていた。しかし正月に会ってみると、その考えは一転していたのだ。私の村では青年活動が非常に停滞している。そのまず第一の原因は真に農業に取り組んで考えない人がいないということであらう。総数三十名弱である。しかも冬になると出稼きに行くのである。これでは冬の農閑期にも話し合う機会さえ持たない現状である。

昭和二十五年から二十七年にはコンスタントに四十万を維持していた農業就業人口がその後急減し、三十四年には十七万となり、二

十八年の中学出の就業人口の内三十四%を占めていた農業は三十四年度には十五%になり、高校出の場合十六%から十%に低下したのである。すなわちこれら現在の学校卒業生の動きは将来の我国の就業人口の産業別構成を示しているはずである。現在フランスでは農業人口の占める割合三十%、ドイツが二〇%であるのでそれをはるかに追越、米国の一〇%にせまっている。

歴史の歯車はすでにそこに向って進んでいるのだ。諸君  
こうなると池田政策もなくとも十年あるいは二〇年先にはそういうことにならざるをえないであらう。

では我岡山県においてはどうかであらうか。県統計課の三十五年二月の調査では、県下農家戸数十七万二千五百三十三戸である。二五年度に比較すると四千五百戸、三〇年度に比較すると三千戸がそれぞれ減少している。それも二五年から三〇年度までは三アール未満が三〇年度以降は三〇から一ヘクタールまでのいわゆる中堅農家が減っている。

そしてこれら農家の内の十八万八千戸が兼業家で全体の六四%を占める。経営面積別ではやはり三〇アール未満の八四%が最高で、一・五から二ヘクタールでは三二パーセントである。又農家の常住世帯人員の構成は九〇万七千六百六十一人で男女別では女が多く、年令別では十九才以下では男が多く、二〇から二五才では女が多く、更に六〇才以上の高齢者も大きな比重を占め、現在農村の主要労働をさへえているのは一子供、女、老人だといえる。つまりこゝに農村の樞山化がみられるのである。こういう現状を充分分析し検討しそれを把握し、農業を学ぶものとしてもっと自覚しなければならぬと痛感した次第である。

# 友に寄す

## 最近の農業事情

畜三 国実 直

▲君、御卒業御目出度う、この程農業高校を無事終えられ、今後大志を抱いて、農業に従事なさるそうですが、その門出に当り、私がか、日頃、心にかけていることを、二・三書いて見ようと思っております。

一九四五年十二月九日は、我國の農民にとっては、色々な意味で一つの記念碑的な日でありました。

御承知の様に、此日は、時の連合軍総司令部が、歴史的な、農地解放の指令を發した日であります。長い間にわたって、地主・小作關係にあえいでいた、我國の多数の農民は、此時以来自分の土地を自由に所有することの出来る農民となり、高い書物小作料から解放されることになりました。

例えば、戦前の状態は、私が生れた昭和十五年には、小作面積の比率は、田で五一・六％、畑で三九・四％、耕地合計では四五・九％にも達してました。これは日本農業に於て長い間にわたってほとんど固定的に維持されてました、耕地所有の状態で、明治四一年の此三者の比率は五〇％、四〇・四％、四五・四％となっていました。此關係と対応して自、小作農家戸数もほとんど固定し、昭和十五年では自作三〇・五％、自作小作四二・四％、小作二七・一％、明治四一年は各々三三・三％、三九・一％、二七・六％と小作農家

が全農家の過半数を占めていたのです。

そして此耕地所有規模の構成は、昭和一五年で五反未満が四七・六％、五反一町が二六・三％で、その合計は実に七三・九％、一町一三町は一八・六％、三町以上は七・五％にすぎませんでした。これが農地解放によって、大きく変化したのは君も御承知の通りです。

すなわち昭和三〇年の所有關係は、自作六九・五％、自作小作二六・四％、小作四・〇％、又経営耕地規模の農家数は五反未満三八・四％、五反一町三二・七％、此合計は七〇・一％、一町一三町二六・四％、三町以上三・五％と小、大農家が減少し、中農家が増加しています。又小作料は、田の場合昭和十六年の全国平均は五二％（ほとんど現物小作料です）昭和二九年では金納でわずか七％と云う低率になっています。もっとも解放後は固定資産税等が徴収されますが、それは微々たるものです。

昨年七月池田内閣が成立し、例の農民六割削減論を唱えています。池田首相は、日本經濟が年九％もの高い成長を続けるとすれば工業部門等に新しい大量の労働力を必要とする。そこで、農業部門の人口は他産業へ自然に吸収されるはずだ、これは人口過剰の農業にとっても経営規模を拡大する余地が生れ「自立経営農家」が出来あがる。というのが池田首相の真意ではないでしょうか？

ところで農業就業人口は、農家人口三千四百四十七万人（三六年二月一日）の四割強ぎと千五百万人と言われている。これが十年間で四割の六百万人になるには一ケ年もの割合で減って行かねばならない。こゝに、三年、農村人口が都市に激しく流出しているのは事実だが、それでも三四年度の農村人口の減り方は、四十六万人に

とどまっています。

又農村人口が減少しても、アメリカ等の事情とは異なり、日本は前にも記した様にあまりにも零細だから人口流出の途中がどの様な姿を描くかきわめて複雑な条件がからみ合っています。西欧やアメリカにしても經濟發展、産業の高度化にともない、農村人口が減少はしたが、その途中では、きわめて悲惨な境遇に追込まれた農民も少なくない、悲惨であったから流れ出たともいえる。環境はもとより違っていますが、はたして日本の場合はどうでしょうか？ 終着駅はきまっても、問題はその途中にどのような線路を敷き、どのような列車を走らせるかに有ります。

所得増進計画を作成中の經濟審議會の見込みでも農業人口は十年後には、現在の三分の二に当る千百万人にしか減らない見通しだそうです。

仮に農民四割論が実現し、平均耕作地二町五反、家族数四一五名夫婦と子供二一三名となったとしても、今日の様に米が主食である限り、色々な点で困難ではないでしょうか？ 又政府の農策の様に果樹と畜産を導入したとしても、果樹（例えばミカン）は約八一十年もかゝると言われていますが、その間に投資する資金は如何するの？ 又畜産にしてもまず資金作りが大変です。仮に政府資金を借りようにも色々条件が有って、なかなか一般農家は融資を受けがたいのが偽わらざる事実の様ではないでしょうか？ 数ヶ月振に我家に帰る感じたことは、ねこもしゃくしも、政策通り「果樹と畜産」と叫んでいることです。しかし悲しいことには資金不足で、又大多数の人が果樹を植えても果樹園には、雑草が植る様な、土地で有りながら、ほとんど利用されて無いです。畜産にしてもただ

家畜を導入したにすぎず、そこにはなら飼料の計画もなされて無い状態で、又少しばかり勉強した人でも、サイレーシを作っても、その利用の方法を誤ってはいないでしょうか？ いずれにしても果樹と畜産は切っても切れない關係にあって、その成功した例として未だ見学したことは有りませんが、神奈川県「多摩梨と養鶏」では無いでしょうか？

こゝで世界の畜産王国、「デンマーク」を少し紹介してみよう。デンマークは、森林面積もせまく、鉄、石炭等の地下資源に乏しく、水力電源もない有様ですから、自然に農業に依存しなければならぬ状態におかれています。現在、農耕地として利用されている面積は三三〇万町歩で、農家戸数二〇万戸、これに従事する農民の割合は約二〇％と云われています。農業生産物の主なものは、酪農製品、ベーコン、卵で、これを生産するための飼料（麦類の大麦エン麦、ライ麦、混播麦で、その内五〇％程度が大麦で、根菜類では家畜用ビート、ジャガイモ、牧草類で、これが輸出により整然と植え付けてあるとのこと）のほとんどが、自給されているそうです。小農家でも六町程度で、全農家の平均耕作面積は一六・六町（友人の話によりますと北海道帯広地方は平均十三町程度）ももっとも多い農場は二五・三町で、その収入も六〇万円程度の粗収入が最低線と云えます。一農家の例を上げますと、耕地六町、家族五名、夫婦と子供三名（一人は軍隊、一人の娘はピエとして他家に働きに出ている）労力は一人、乳牛は成牛八頭、仔牛一五頭、馬二頭、ベーコン豚二五頭、鶏二〇〇羽で、年収百三〇万円、純所得四三万六千円を上げているとのこと。一見耕地面積に對し所得が少ないうえですが、労働力が一人ですから誤解しない様に、又営農資金も

若干の条件付で、土地、其他を買入する時や財産を相続し、自作農となる場合でも、親から財産を買うことになるのですが、この場合一割以上は自己資金で残り九割迄は、政府資金で、その利子は年三分の低利資金で、期間は七〇―九〇年の長期で返せばよいのであるから、毎年の償還金は借入れた金の一割で、大した負担ではなく、大体三〇年間年賦償還し家業を息子又は他人に譲るとすれば、残り四〇―六〇年の償還金が残ることになりますが、これは財産を譲った金で、全部返済して、働けない人は老人ホームに入り、余生をすごすそうです。

我国も、西欧並の農業経営を行うには、経営規模の拡大は云うに及ばず、水田に於ては湿田を解消し（雪の降る地方は除くとして）その地方の特色を生かし、土壌の検定をして土地に適した作物を作るか、作物に適した土壌を作り、土地を高度に利用すると、より多量で安価な牧草等が生産出来、一升約四〇円以上もする原乳が、デンマークの様に三五円以下の生産が可能になるのではないのでしょうか？ 要するに今日の農業技術は、他産業に比べ低い、日本いや世界の農業は、曲角に来た！ とよく耳にする言葉であるが、特に日本の農業は食わんが為の百姓であり、今後の農業の在り方としては、金儲けせんが為めの農業になるべきだと思いますが、そのためには、世界で唯一の私立で、単科大学、我が農大学生諸君が、明日の国家建設の為に農村に帰り、良き指導者とならずことを願望し筆を置きたい。

※一部分文部書院の諸雑誌及び朝日新聞を文献として引用致しました。

※語句の説明として、その語句が用いられた一部をさいて次のこと  
力は大きい。たゞ農村社会等における存在が、個人に思索と自由なる人格の統一を与えてくれるだろうか。すでに最善を尽くす以前の準備期において、ラファエロの様に『他人の狂気』を治そうとして一生懸命奔走している間に、いつの間にか自分も連中と同じく気違いになるのが『関の山』になりかねない。実際今の私が他人の狂気等愈す力など持ち合わせないが、それだけに他人の狂気の存在に入ること自身に問題があると思う。ルネッサンスや産業革命においてすべての人が悩んできた道である。「一粒の麦、もし地に落ちて死なば唯一つにてあらん云々……」が切実に深く感銘を呼ぶ。静かに味わいたいものである。私の立場も農村社会の古い意識と新しい認識の錯綜にあるいは個人的対社会的関係の中に転期に立たされている点（問題の大小は別として）類似的といえる。私の理想と希望が持ち続けられる生活と環境を求める時、農業からの逃避、転向を迫られたこと幾度となくあった。

真の人間像は、幸福を求めいつも創造的に生きられることでありその挫折は死あるのみで、不満の連続としてだけの存在である。真の我々の偉力が知であり愛であるならば、それを充分陶冶するだけの社会的条件がなければ、決して実現は不可能である。全然社会的体制に余裕がない所（これが農村意識一般であり私の地域社会にも云える）に、人間的調和のない私自身が入ってもやがては矛盾への服従となるだろう。観念の放棄のみであって人生、生活の探究など到底及ばない。たゞ狭く張りめぐらされた壁の中に青空でもながめて生活していたかも知れない。

同じ悩みは、すべての農村の長男の一度は体験することで、多くは家に閉じ込められ希望は折られ、封建的意識と資本主義社会の圧

を押入されんことを願います。

義務教育を終えたら、子供はすぐ自活して、それぞれの人生を歩み、男子であればセールとして他の農家に行って働くか、他に職を求めて出て行き、女子であればピーエと呼ばれる女中さんの様な家事手伝いを他家に行って働いて貯めた金をもとにして農場を買ったり、商売を始めたり、上級学校の学資金にしたりします。

## 農民像への錯綜

畜三 高山 昭夫

思うに、私の胸にあるイメージと社会的現実の矛盾が、創造され止揚された姿として眼前に現われるのはいつのことか。大きな農業問題の一つ一つが、たゞ私に漠然とした危機感と不安感となって、意識を押し行動を制していた。田園的情緒と怠惰の中に相容れない不満が少しづつ燃えているのを知っていた。その葛藤が、只自分自身の責任であるかの様に。このことは高校時代から、いやすでに中学時代からのわずかながらの抵抗であったかも知れない。それが今になって改めて現代の経済体制における農業を知ったことにより、ひそかな望みも、漠然とした葛藤も、より私を人間像創造の道へとかり立てるのであります。これが恐らく此処三年間の過程における結実かも知れない。

個人が社会的人間である以上、社会的集団に規制されることは言うまでもない。個人としての質的存在が、社会的量的関係においてその存在が軽視されがちであろうとも、やはり個人の最善を尽した追の中に働いている。私はこの友を近くに、遠くに見た。彼等は力のある限りをつくし、動じないことを知ると、百姓の姿に返るのである。此人達を思えば学生々活の中に安楽を求め逃避的生活をすることなど言語道断といわねばなるまい。内的矛盾・不安・苦悩と焦燥の中に二次的な、内からの克服が必要ではないだろうか？ 真なる人間の幸福は、この課題の放棄からは生まれえない。勇敢に立ち向かって行くことが使命であり、創造された内からの克服こそ一生かゝって取り組んでも余りがある。

自然の征服、内的征服の準備段階として非常に大切な一時期であることを認識する所以である。

私はこのさゝやかな望みを、真に農村に生きる人々に求めた。二

年間の全国農村旅行が、私にあるイメージを与えてくれた。農村に真に生きる人々、しいたげられ、曲りくねり、押しひしがれた小さな花の様に、その存在は、一点である。暗中模索の中に生み出した貴重なものだ。その数は少ない。そこへの道もひらけていくわけでない。数少ないからこれは特殊で現代の資本主義の中では今後を期待はできぬだろうなど、農村問題対決への真諦味のないことの暴露であると考える。多くの先覚者の人生観を学び、その姿を目前に発見した私は、理想的でロマンチックな学生々活を送っている今をふりかえると、何かユートピアンでしかない。この発見は私の心を痛くむちうつのであります。

思いつくまゝに書けば②西山氏、上野氏、井上氏、古谷氏、笹崎氏、松丸氏。会ったすべての人が、創造的である。実践の中より学んだ人間像を、日本農業問題を矢鱈に論ずる有識者はもちろん学ばべきであるし、私自身の指標であり且つ結果である。権力欲や支配

階級優越への欲望、所有欲やオポチニズムなどで自分自身が動かされていく様では、永々にこの不安から脱することはできない。

急に民主主義が必要だからと帰郷運動をしたり、農業の曲り角など数年前から叫び、曲り角を論じる指導者自身が曲り角を曲れないで笛吹を演じている。これが日本農業の根本問題だと思ふ。農民と一緒にすでに高次の段階で二次的不安に奔走している人々の姿こそ、与えられた問題意識への帰結である。「吹くだけでは吹くことにならない。君達は指を動かさねばならない」とゲーテは言っているが、この意気を実践されてこそより高次の安寧へと進むのではなからうか。「技術家であり社会運動家であること」松丸氏は一端をこう主張していた。笹崎氏は「泥まみれになってもよい。少なくとも死を待たれる様な存在でありたくない」と語った。これが妙に私の心をうった。

西山組合長の村づくり運動はお互の信頼感の中に個人を没しつゝ、その存在を常に忘れず農村社会へ意識の反映をした。その主体性はすべての人が、学習と実践の中に築き上げた人間像であり、真に農村の要求している人間像である。いたづらに技術者として指導者の意識をもつことなどもうこれ以上沢山である。偏狭地にても常に学ば生活の中に学んでいるエネルギーな努力の結晶である。矛盾の統一の中に迂回し、泥まみれになり、経済的実証的に築き上げた人格である。泥まみれ、易しい様で、実に今思うと窮屈を感じる。しかし此処でとまどっては——。勇敢に進もう。

社会の変革期には日本に於いてもわづか百年の間に法然から一遍迄の宗教思想家を生み出した如く、又独乙の観念論最盛期に弁証法的唯物論を生じた如く、その存在は貴重であった。現在の経済体勢下

## 学会便り

### 春の畜産学会開催

教授 鈴木正三

#### 春の畜産学会開催

大学及び研究機関の内容や水準が広く評価される昭和三十六年度日本畜産学会大会は四月七、八の両日京大において開催され、第一日目の午前は総会並にドイツのクルガー博士の家畜の登録についての特別講演が行われた。引続いて午後より第二日に亘って次の各部門に分れ一般研究発表が行われた。即ち第一部解剖生理、第二部育種、第三部繁殖、第四部栄養及び飼養、第五部飼料及び飼料作物、第六部畜産物、第七部畜力利用、第八部経営及び経済。

因みに本学よりは次の通り各先生の研究発表が行われた。

- 一、豚血清中の抗Q凝集素に関する研究  
鈴木正三教授、田中一栄講師、渡辺誠喜助手
- 二、野鶏と白色レガホン種との血清学的関係、佐々木清綱教授、鈴木正三教授、田中一栄講師、渡辺誠喜助手
- 三、鶏の血液型に関する研究、渡辺誠喜助手、近藤敬一（学生）、鈴木正三教授
- 四、家兎における抗体の移動について、岩瀬伸夫（大学院学生）、勝連絃一郎（学生）鈴木正三教授
- 五、兎の雌性性に関する研究、平林忠教授、平山常雄助教
- 六、授乳牛における物質及びエネルギー代謝に関する研究、海塩義

の農業の此重は小さい。その中でこそ一層農村をふり返り、大切に育てなければならぬし、真に人間のものがその達成の為に要求されるのである。私の生活の中心はこの様に師を求めて、時には沈潜してディアレクティックなイメージを求め、時には衝塞と彷徨、昏迷の中に生涯を導びいている。この間に人間の善、調和の果しい追求があり、私の課題に対する信条が生まれる。農学に生きる私が、農学なくしては考えられない段階において、宿命的不安がたくましく生きる人々によって勇気づけられた。と共に私はそれに向って前進する。「最上のものは、言葉によって明らかになされ、行為の源である精神こそ、最上のものである。既知より未知を展開させることを学び、こうして師に近づくことである」マイステルの卒業証書の一節を時折、開いてはゲーテの深淵にふれ、アリオシーヤに心寄せる一と時は楽しい。

農村の生活の中に、調和の哲学は持ちつゞけられる日。卒直に話し合える日。そして自分自身の受け入れ態勢がととのった時に、農業に取り組んでイメージを現実化したい。それ迄は現実をそっとしておきたい。たゞ実践と理論が、私自身の所有となる迄……」だから二度繰返すがいたずらに農業問題は論じないことだ。

註① 決して卑下した言葉でないが、現下における農業一般のあらゆる貧困はといつてもよい。

註② 西山氏—愛媛県立間農業法人の組合長、「四月十一の農業法人」上野氏—新利根開拓の指導者、「一月二〇日」週刊朝日  
井上氏—兵庫県神出農場経営元東北大学教授  
古谷氏—千葉県旭ヶ丘酪農共同経営の責任者、  
笹崎氏—埼玉種畜牧場長「養豚大成」「養豚増益法」など  
松丸氏—静岡県函南村に住み農村の社会的、技術的な実践者である。「村の教師論」「農民の知恵」その他

## ひとこと

東京農工大学獣医学科学生会では昨年末獣医学の反省と未来の発展と題する職場アンケートを行なった。その総括をみると第一部「職場について」のアンケート、第二部「教育と社会について」のアンケートから成る。

獣医学科に入った理由として一五%が農業問題に関心をもつて入った。「何となく」というのも一五%で最も多い。

これが職場を選んだ理由では「農家の生活向上の為」が五%に減って、「なんとなく」も五%に減っている。

## 男教授

七、鶏肉に関する研究、鬼原新之丞助教 相川勝信助手  
一方四月六日には矢張京大において日本家畜血液型研究協議会の総会と講演会が開催されることになっている。因みに本会は昨春設立され国際家畜血液型研究会の一分派であって、家畜育種部門における血清学的体質研究の重要な役割を演じているもので、これが組織としてはセクレタリーとして佐々木清綱博士、アシスタントセクレタリーとして細田達雄博士、（農技研）と鈴木（筆者）が当り委員約十五名を以て構成している。

また四月十二日には東大農学部三号館において昭和三十六年度家畜繁殖研究会の総会と研究会が開催されることになっている。正に学者、研究者にとっては春は先ず学会からといった感じの強い昨今である。

# 茂原から世田谷へ

畜産学研究室

教授 鈴木 正三

終戦後茂原で誕生した農大の専門部畜産科は学制改革にともない新制大学畜産学科に昇格変更した。戦後十五年とよくいわれるが我が畜産学科も揺蕩期を既に脱して整備充実期に入っているわけである。歩いて来た足跡を見ると卒直に歩いて必ずしも輝かしいものゝみではないようである。健康な歩みをして来たとお互に満足したものであるがそれも疑わしい時代もあった。学生諸君にはもの足りない、設備の不備など合言葉のようにいわれ、本学からとり残された分校での生活は確かに職員も常に気にしていた点である。悶々の学窓生活を送って出られた卒業生も数多いこと、思う。然し草深い茂原の生活と悲しまないでむしろ牧歌的な畜産人の自然環境に恵まれた明けくれたと喜んで慰めてもらいたい気持で一杯である。確かに茂原には世田谷で得られない畜産的長所も幾つかある

ことは事実である。たゞそれが農大の経済事情に制約されて表面に現れず学生諸君にはっきり把握してもらえなかったことは遺憾であった。美しき追想は我々若人に次の発展の障壁となつてはならない。徒らに過去の甘い思い出が次の時代の制約条件となつてはならない。この際お互に隊伍堂々と春尚浅い房総の天地から春爛漫の世田谷の学園へ行進しようではないか。世田谷こそ我が畜産学科の母体であり、永遠の礎となるところである。そしてこの地で次の新しき発展が約束されている。母の懐にいだかれながら伸びのびと十代の發育を遂げたものである。我が畜産学科も十七才の若人の最も危険時代に逢着している。お互に大いに自重しなければならぬ春である。やがて二十才の年も巡り来る。二十才の声を聞けばそろそろその人格、素質を批判される時期である。この辺で大いに頑張つて農大畜産学科の特徴を發展せねばならぬ秋である。特徴ある農大畜産学科、それは決して夢ではない。七十年の歴史をもった先輩畜産人のあらゆる方面での活躍は養鶏の農大を、養兔の大学を、そして養豚の農大

を具現させ広く社会に評価されて自他共に認めているところである。この際より一層この方面での内容の充実を計り、各大学畜産学科に位して大きく呼吸しゆるぎなき基盤を確立したい。ものゝ足りないという先入観は唾して顧みるべきではないと思う。なるほど旧帝大畜産学科のそれに比べれば設備不十分のことは明かであるが、戦後の畜産学科としては一応不満足乍らどうやら具備しているものと認める。たゞこれを有効適切に運用していかぬところが最大の農大畜産学科の欠点と考える。確かに昔ながらの特攻精神は通用しない現代ではあるがもう少し農大の現状を充分洞察して現設備をフルに使用して大いに勉学にいそしんでもらいたいと常に念願している次第である。決して現状に満足せよというのではない。現状維持は退歩の前程である。日進にして一刻も止まることのない科学の世界であるから大いに前進邁進の気概をもつべきであると考える。永遠の理想に生きて幻滅の悲哀に泣く若人の明けくれれば農大畜産学科の学生諸君には特にびたり来る感慨ではないだろうか。

兎に角我々畜産学徒は現下日本の最も重要視される畜産界の第一線舞台上に活躍する時代の遺児である。そして農大の畜産学科の名声を中外に宣揚する恵れたチャンスに遭遇しているのである。教職員、学生真裸になって共に我が畜産学科の建設に汗を流したいものである。

## 食肉随想

製造研究室

助教授 鬼原新之丞

人間は生れた時から死ぬ時迄食べる事で始まり食べられなくなつて終る。この間食べる事で苦勞したり喜んだり、もうけたり損をしたりしている。街をあるけばほとんど軒並に食堂飲食料品店が並んでいる人が集まればその目的が高邁な学術宗教、政治、経済の集会であつても飲んだり食べたりする事が付随する人生の半分はすべて食べる事である。人間は動物の中で特にいろいろの注文をつけたがる文化生活を営むと言ふ事は如何にして味の良いものを経済的に又栄養的に食べるかと言ふ事が重要な要素となつていようである所が人間の好み

は顔のことなる如くまちまちであるから単一の規格のものでは満足しない、最近我國の乳、肉、卵などの畜産物の消費は著しく増加して大衆的な食品として広く利用される様になつた事は誠に喜ばしき事、栄養価の高い食品であると共にひとたびその味をおぼえれば忘れることの出来ない魅力がある事が大衆に受ける大なる原因と考えられる。この様な畜産物の風味は何によつてもし出されるか今だに未解決の問題であるがアミノ酸等の成分も大きく関与している事は事実であるが又脂肪もこれらの味を左右する一原因であると考えて良いと思う、我々が牛、豚肉を食する場合油がのつて美味だと言ふが牛肉について言えばその筋肉内に適當の脂肪が交雜しているものが美味であり、われわれが珍重する「鹿の子肉」は筋肉組織に脂肪がうまく沈着している為柔軟になり肉の歯切れが良くなり、すき焼等にすると舌の上でとける様な感じのする牛肉となる、即ち高級な良質肉と見て良いわけである。さらに味は与える飼料により大きく左右されるものである。「鹿の子肉」の高級品を作る地帯ではもち米をたい

与えたりしている。良質肉を作る為である、豚肉を生産する場合も勿論飼料の種類が肉質に大きく影響するもので不良な魚粉やアラ等を与えると黄色脂肪になり不味になる事が知られている。脂肪の硬軟は飼料により大きく左右される事も事実である。この様に味はその中に含まれる脂肪によつて大きく左右され、その脂肪は飼料の影響を受ける以上飼料を合理的に与えて良質の脂肪を経済的に生産する様心がける事が第一に大切であると考える。又野菜、果物、魚などとりたての物が美味しい、搾りたての牛乳など又生みたての卵など新鮮なものはどうも美味いものであるが畜肉類はそうは行かない、肉類の本當のうまさは醗酵のやや進んだ頃合に出る加工も原料としてはなるべく新鮮なものが良いがその工程中適度の熟成を考えねば良品は得にくい、この熟成の程度は各筋肉により又温度、其他色々の条件により異なるそれだけに利用目的に適當する原料肉の鑑別は誠にむづかしいが明らかにせねばならぬ問題である。肉質を左右する因子について考え見ると三つの要点がある。第一の因子は原料生産の品種、性別、年齢、及び飼料や管理であるが特に重要なものは畜類の疾病は人と共通なるものが多い

からその健康状態は公衆衛生上ばかりでなく当然肉質にも影響する、第二の因子は肉を得る為の屠殺方法で動物に激動を与えた直後に屠殺すると肉質内部に変化が起り貯蔵性を害する。これは体内のグリコーゲンの分解による乳酸の生成を早めて死後強直現象の異常促進となるからである。第三の因子は食肉自身酵素が存在する事又微生物附属の機会の多い事などから死後の肉は刻々と変化する、この変質の理論についてはなお不明の点が多い。肉類消費が多くなるにつれて心配なのは肉中毒である、幸に我々国では大事件になつた事はないが欧米ではしばしば起つている。織毛虫や条虫から来た中毒ボツリヌムと言う細菌によるソセーシ菌等の中毒死などである、ボツリヌム菌の生産する毒素は耐熱性であり致死率は五十%を超えと言われている。いかに外観が良く美味であり経済的で栄養満点でも衛生的に不安なものは良い食品とは言えない肉及び肉加工品をより良い食品とするには先ずこれらの問題を追求解決して行かねばならないと考える。

## 動物は不道德的か

畜三 狩野 真男

最近、畜産ブームに預り世論をわかしておるが、我々動物に対しますます愛着を感じると共に、人間生活の一要素である事は認めざるを得ない唯一の物である。動物は申す迄もなく、人間的なものであつて、動物の社会には人間的行為はないのであろうが、集団生活を営んでいる高等動物の間には、人間社会に似かよつた、一つの規律の様なものが見られる、直接だれしも目に浮ぶのは猿であろう。それらの動物は人間の社会的行動とでも論ぜられる様な、理性的なものでなく、種族が生命保存の必要からのものであつて、各自の自覚の上にあるものではない、全く本能的なものである。すなわち、動物は自然の本能に生きていますだけであつて、何ものもの生活をしていないではない。しかし、動物の生活を浅ましいと一口に言うであらう。人間が不道德的の行動をしようと、犬畜生に劣ると誰しもいうたしかに人間から見れば、動物の行動に道徳的な行動はないが、それでは動物は不道

徳かという決してそうではない、動物達の間には、何ものもの行動も何もないのである。道徳とか不道德とかという事は、人間社会の事であつて、道徳に生きていない動物を引合に出すのはまちがう。人間が不道德行動をしようと、動物だというのが、元來動物と人間は何の関係もないのだから、こういう場合は、非人間的とでもいふべきであらうか。非人間とは、人間としてあるべき姿に生きていないという事であつて、動物の行き方とは全く別なものである。動物は自然の本能に生き、自然の環境に生きる事が動物なのである。職業や学校が人間に特有なものである様に、動物の生活を望ましいと考える人間はないであらう。しかし、動物の生活は浅ましい、あはれな生活というのは、人間の頭で動物の生活を考へ人間に反する行動があるのをいふのであるから、人間の間にしたがふ必要もないであらう。

動物は自然の本能のままに生き、浅ましいどころか、動物に生きる事から、むしろ動物としては美しい生活を営んでいるのである。

## 馬放談

助教 平山 常雄

物の有難さはその物がなくなつた時に初めて痛感するものである。有形のものであれ無形のものであれ古今東西の歴史がそれを物語っていることは諸兄も良く知つている。又逆に「去るものは日々に疎し」ともいはれ日時の経過につれて親しまれたものも有難がられたものも次第に忘れ去られて行くのも世の常である。ただしこれには必ず代行者が現れるのが原則である。天蓋孤立の境地に立つた人間は永久にその過去を忘れることが出来ないだろうし、砂漠の中に水を失つた人間はオアシスの発見に狂奔するだろうが新なる地に友を得、オアシスの傍にて水を失つた人々は水の有難さを忘れ旧友の情を忘れて行くかも知れない。こんなことが現在の馬族にもあてはまるかも知れない。有史以來馬は人間と離れることの出来ない家畜であつた。多くの動物の中からその有能を認められて四千年もの長い間人間と行を共にして来た。旅行に移住に、

農耕に戦争に、そして社会生活の中に溶けこんであらゆる労力を提供して来たのである。大きな体、軀長い顔、それでいてなんとなく可愛らしいまなざし人を見るに極めて敏で、家族の一員にもなり得る素質を持っている此の愛すべき家畜は民族斗争の間にあつては有能な戦力となり弾丸糧を運び一國の運命を負つて活躍して来たのである。戦線に働く者に取つて馬糧大切なものはない、夜を日についで行軍に馬を失つた部隊の惨めさ馬一匹を失つた為めにどれだけの人間が苦勞をしたか過ぎし日を思へば誠に夢、幻の如くである。広島の空に原爆の光を受けるや世は一変して平和を求め平和産業への道を急いだ。畜産界に於いても食糧増産の唱道に答へべく乳牛よ、鶏よと農家経済の多角化を計り、畜力は次第に機械力に置換へられつつある。狭い土地の生産性は大きな体軀一人前になるに満三ヶ年を必要とする馬必要性を失ひむしろ邪魔にさえなつて来た。かくして馬の家畜としての必要性は次第に後退しそして忘れられていつている。だが半歳を雪に鎖され雪解けと共に田島に出て農業を営む地方に取

つて馬は今なを重要な家畜である。積雪を利用しての材木の切り出しに必要な運搬力は馬である。雪國での冬の交通はやはり馬ソリだ此の地方の人々は馬の生産に馴致に昔変らぬ愛情を注いでいることであらう近年日本人の食生活に変動を来した為か肉と名のつくものはいづれも高い値段で買売されている。精肉にハム、ソーセージに罐詰にその利用は広範である。牛豚は勿論山羊兎鶏として馬と我々の食膳をにぎわしている馬肉は食へぬといつてもその姿を変へれば結構おいしく胃袋に納まるそして一度忘れかけられていた馬も再び人間社会に姿を変へて近づきつつあることを心にとめておいて頂きたい。あの愛着ある馬が肉となつて胃袋を満たすといえはあまり良い感じもしないがこれも家畜としての御奉公となれば致し方もあるまい。四千年の古い歴史をもつ馬が家畜の斜陽族から脱皮するよい機械ではあるまいか現代の人間も此の功労ある馬を十二分に利用し家畜としての地位を存続せしめることこそ馬を培つた祖先に対する敬意ではなからうか。

## ルイセンコ遺伝学説 に對せる私見

私は幼ない頃から昆虫・植物を採集したり観察するのが好きで、中学、高校時代においては、生物クラブに所属して週初めの日曜には野外に捕虫網や罫乱を下げて歩くのが一番の楽しみでもあった。またそのような関係から早くしてダーウィンの「種の起原」に親しむようにもなった。

高校一年の頃、政治問題として日米MSA協定の調印をめぐって去年の安保改定ほどではなかったが、大きな社会問題としてのしかかっていた。その頃から世界における二大対立ということ把握し出した私は同時にそれまで遺伝といえ、三対一とか九対三対三対一の分離比などで代表されるメンデル・モルガニズムのみしか知らなかったのだが、それ以外にルイセンコ学説という新しい遺伝学が芽生え、日本においても若い進歩的な先生はルイセンコ学説を指示しているということを知り、何となしに知るようになっていた。それには生物部の

顧問に渋谷寿夫先生（京大理学部動物学教室・動物生態学専攻・理博）のような大正年代の方ではあるが進歩的な学者を持ちえたということも大きくプラスしていると思ふ。

もちろん偉そうなテーマはつけたが、私が実験上から以下のことを記すのではなく、高校時代のクラブの遺伝実験としてはごく誰でもやる。ショウジョウバエやマウスやモルモット、ラット等を使用したにすぎない。それも半ば今から思えばごく幼稚なものにすぎなかった。そして私の高校卒業の年に国際生物学会が日本で持たれて、かの「生命の起原」で有名なオパーリンの講演などを京都大学へ聞きに行ったことがある。もちろん英語で弁ぜられた上、内容などは分るはずがなかった。

しかし私がネオメンデル・モルガニズムに傾き、ルイセンコ学説を肯定するようになってきたのは、メンデル・モルガニズムがあまりにも機械論的固定観が生命や遺伝を偶然性に基礎を置くゆえんである。

私はそのような点から、最近ソヴィエト

においては畜産方面に活用して飛躍的前進をとげているというのを聞き、実は鈴木先生の遺伝学の授業を大いに楽しみにしていたのであるが、私は率直にいつて期待はずれに終わった。というのは、ここに鈴木先生のノートをかかかってそれに反論しようなどとは毛頭思わなければ、またそのような能力は小生にはないが、若干の疑問的を指摘すると例えば獲得形質の遺伝についてはルイセンコイズムというものを完全に否定しているにもかかわらず、細胞質遺伝のところにおいては前半においてこれを全面的に否定しているかたわら、その後半においては明らかに認めているという矛盾が生じている。またその矛盾が一層明確になるのは、ソ連邦の遺伝学を説明している項であるといえる。そのような点からも一体先生がそれを肯定しておられるのか、否定しておられるのかすら一年間も授業を聞いて解らないというのはいささか解し兼ねるところである。

ルイセンコは彼の著書「生物学の現状」の中で、メンデル・モルガニズムを次の如く批判しているといわれる。

るといえる。

それともう一つ重要な点として遺伝学を追求する上における大きな相異点があることを記しておかねばならない。というのは自然弁証法的方法論をメンデル・モルガニズム学説が否定するのに対し、ルイセンコ学説がこれを肯定する側に立ち、遺伝学を問はず進化論の追求にもこの方法でもって学問追求の基礎的態度として行っていることである。

メンデル・モルガニズムは機械論的。確率論的な方法によって行っているのであるが、生物体を構成している物質は大なり小なりの形で常に変化していることのみをとって見てもこと生物学に関する限りは自然弁証法によって当然といえよう。

以上まだ掘り下げは十分ではないが、私は生物の獲得形質の変化は当然これを認めべきであると思ふし、それすら否定するとすると、生物の変異、または生物の進化を否定することに等しいといわねばならない。我々人間も何億年かを経て、単細胞動物から進化してきたということは、メンデル・モルガニズムの学者の方々も認めておられる事実である。（五九ページ）

『メンデル・モルガニズムの遺伝学説』は、ワイズマンにしたがって染色体は特殊遺伝物質を含むと主張する。この遺伝物質は生物体内にあり、次代に遺伝するが、個体の質的状態や生活の状態とは無関係であるという。そのことより、生物の獲得性の遺伝を否定する。またそれにより、生物進化に対する何等の意義を持ち得ないという。環境は単に遺伝にしたがって、いろいろな形質の発現することを許すバックにすぎない。それ故メンデル・モルガニズムの遺伝学説は、遺伝的性質の変異は環境や生命の状態とは全く無関係だと主張し、ルイセンコの学説を非科学的であると片づけている。ところが事実は全くこれと逆なのである。第一に衆知の通りであるラマルク学説の命題は、生物体に対する外界（環境）の積極的な役割や獲得性の遺伝を認める点にある。これはネオダーウィニズム（ワイズマンの思考方法）の形而上学などとは違ふのである。そして決して誤りではなくして真実であり科学的である。

第二にルイセンコ学説は決してネオ・ラマルク主義でもなければ、ネオ・ダーウィニニズムでもなく創造的ソヴィエト・ダーウィニニズムである。両方の誤りを除き且つダーウィニニズムの誤りであるマルサス主義から脱却したものである。（滝川註）マルサスの人口論）即ち、人口は幾何級数的に増加するが、食物は算術級数的にのみしか増加しない）に強い影響を受けたダーウィニ思想は同一の種内での闘争を認めているのが適当でないとルイセンコはいつている。（千島喜久男著、新生物学の基礎による）

また今年にはパブロフの死後二十五周年記念にあたるので、色々と新聞紙上においても、それに対する企画がなされているようであるけれども、そのパブロフは本能は生物が環境に適応して複雑な条件反省をつくり、それが固定化されて連鎖を形成した一連の行動であると考えた。換言すれば、生物体が周囲の環境への適応によって形成した無条件反射が永い進化の過程で固定したもので、即ち獲得性の遺伝したものであるという。（東大ソ医研訳による）

パブロフの高次神経活動に関する学説はダーウィニニズムの線に一致し、ミチユールの獲得性遺伝肯定説の線にもそって



## 北海道遊山

柄沢 和夫

―昭和新年―

洞爺湖キャンプ場で、簡単な昼食後昭和新年めざして歩き始めた。この山の存在を知ったのは中学時代。麦畑がいきなりもち上り、山となり、赤々と燃えているという。それ以来限らない興味をもち続け、今実際に見ることが出来るのだ。なんだか、嬉しくなり自然と足も軽くなる。いい歳してと言うかもしれないが、珍らしい物、不思議な物に人一倍興味をもつ僕が、いかにこの山を見たかったか察し願いたい。

近くて遠きは田舎の道の言葉を確かめてみたいのに、いくら歩いても山が近づかない。目の前に見えているのだ。「ええい、めんどくせえ」と、江戸ッ子の短気を起し、とてつもなく広い豆畑をつまき事にした、いい気になりがさごそやってくるうちに。「こらー」と大喝。「なんだ、お前達わ」野良姿のおやじが鎌ふり上げている。「すいませーん、道に迷ったのでーす」「バス通り歩いてる奴が、どーしてこんな所に入ってくるか」向様の方が、道理が通って。事をあらたえず引返すこととあいなった。

すでに二時間歩いてる。僅かな金を検約して歩いたのがいけなかった。北海道は広い。途中からバスに乗り、新山に着いたのは、三

時近かった。

活火山だけあって、山全体からもうもうと白煙を上げ、岩肌は侵蝕されてなくガチャガチャである。木等は一本もない。なんのことはない、巨大な焼石が直立っている様なものである。あまり高くなく、少々がっかり。

よそいき姿の、多くの観光客は頂上までいかない。幸かな、我々はバタ屋のいとこの様な格好している。躊躇せず登ることにした。小さい山ながら、噴出ガスと熔岩上の登山道が不明瞭のため登りにくい。だから、麓で黒百合(恋の花だそう)を売る、おねえさん連が口々に道を教えてくれる。一人づつやればいいのに、七、八人一齋になり、親切なこと甚だしい。ところが我々は、その絶大な親切を裏切り、道を失い又もや引返すはめとなった。豆畑でこりているのに。

ようやくにして、頂上にたどりついた。噴き出すガスは、 $SO_2$ 、 $H_2S$ 。化学実験思ひ出させる悪臭。涙はポロポロ、喉はヒリヒリ。よっぽどの変り者でない、登頂の感激は無いだろう。又、むし熱く、着物のままトルコ風呂に入ってる感じ。それもそのはず、キャラバンシューズのゴム底が溶けてくる。恐ろしくなり、直ちに下ってしまった。

山麓に、昭和新年博物館がある。博物館と名が付くからには、公営かと思ったら私営であった。だから、切符売のおばさんが頼みもしないのに出てきて、説明してくれる。他の客がいないから、退屈だったのだろう。我々はカモとなったらしく、ものすごくしゃべり。御好意は感謝するが、ガイドブックで我々の知ってる事ばかり。悪いけど、馬耳東風。その内誰かに呼ばれ、行ったきりもうこ

ない。聞いてはないのが、ばれたらしい。

日は西にかたむき、白煙は橙色にと変ってきた。眼下の洞爺湖も灰色となり、人氣も少なくなった。帰りは始めからバスに乗った。四〇円だった。

―大雪山―

北海道の最高峰、旭岳を含む大雪山国立公園は、我々の一番期待していた所である。

旭川駅より、バス二時間で天人峽温泉につく。20kmの直、線でご道路をつっぱしり、温泉に着いた時雨が降ってきた。ここへは、日本一と称する「羽衣の滝」を見に来たのである。だが実際に見て、なにが日本一だか今だに分らない。高い所から、汚れない漏水が流れ落ちているだけであった。

昼食をとり、湯駒別温泉までの山道を歩き始めた。鬱蒼たる大原始林の中を雨に降られ歩くのは、気が滅入る。時々前を行くパーティーの吹く熊よけの笛が聞こえ、静寂を破る。熊の害はほとんど無いというが、今にも出そうな山で薄気味悪い。それでも、俺等の顔見りや、熊は逃げるよ等と駄じゃれを飛ばし夕刻近く、キャンプ予定地についた。しかし雨は一層強くなり、テントは張れず山小屋に逃げこむ。おかげで旭川山岳会の人々に、大雪山登山の注意を受ける事が出来た。道に迷い易いとか、毒ガスが出てくるから気を付ける等、大分驚かされたが、皆親切な人で気がいい。

朝になり、雨はやんだがガスが出、好天は望めそうもない。2時間程で旭岳石室に着いた時は、強風と濃いガスで一步も進めそうもない。山岳会の人を出発していったが、我々は日程は狂うが危険なので、ここに泊る事にする。また午前10時である。昼頃になり、避難

する登山者で石室は満員となりぎやかになって来た。石室と言っても、石を積み、セメンで固め、トタン屋根のりっぱなもので30人位は泊れる。無料で提供され旭川市に感謝する。

翌朝も雨模様。旭岳を含む大雪山を越えようと層雲峽温泉に着く、そこには、どうしても訪れたいので無理をして出発した。同行者があり、6人となり心強い。

砂まじりの、火山礫の登山道は歩きにくい。ざらざらと崩れ落ち、足もとが落つかない。登りつめて行くと、急に平地となり山頂に来たらしい。視界はまったく無く、道標さえ見つからぬ。皆で手分けして「旭岳山頂」と書いた板を見つけ、ようやく頂上に来たたと安心する。次が大変。磁石を頼りに、雪溪上にかすかにつけられた足跡を追い黒岳に向かった。8月というのに、凍りついた雪溪をいくつも横切る。山頂一帯は大平原となっており、どこが尾根だか、谷だか分らず随分気をつかう。しかし、一面コマクサ、ツガザクラ等の高山植物咲き、我々をなぐさめてくれる。又道松の中から、シマリスが飛出して来、目の前にちょこんと座り、真黒な目で我々を見つめる。キャラメルを投げてやったら、逃げてしまった。お口に合わぬらしい。

10時過、黒岳石室に着いた。冷えきった体を、コンロで暖めているうち、いくらかガスが切れてきた。大雪は、ちらりちらりとその広大な山容を見せ、気を持たせる。しかし、気を持たしただけで、案内書の写真の様な大観は一度も見られず、去る事となった。

最後まで大雪は我々に冷たい。まもなく、土砂降りの雨となり、雨水はザックを重くし帽子をつたい背中流れこむ。ほうほうの状態で層雲峽温泉にたどり着いた時は、唇は紫色で、寒くて口もきけな

い。茶店にザックをあずけ、大衆温泉にすつとんでいく。硫黄臭い湯気の中で、ようやく身体が暖まってきた。乾いたシャツに取り代え、人心地をつけ、濡嵐から人間にもどつた。

日程の遅れを取り戻すため、4時発のバスで層雲峡も見ず出発した。網走線川上駅に着いた時、汽車はホームに入っている。間に合つたと、ほっとした時、一人が叫びかけた。「茶店に傘忘れてきた！」あーあ。

#### 一 雌阿寒岳

いくつかのキャンプ場を泊り歩いたが、阿寒湖畔の一番にぎやかだった。バス通りに面しているせいか、俗化されまるで気違部落。50近いテントが張られ、ビキニ姿のお嬢さんが闊歩し、ギター持った黒いオルフェ達が行うろうろしている。湖上では水上スキーが走り廻り、太陽がいつぱいとばかり青春を謳歌している。あきれていてもつまらないので、我々も若者達の遊びの仲間入りした。幸か不幸か、丁度僕の誕生日だった。夜になると、キャンプファイアーをかこみ、ムリしてウイスキーで乾杯した。歌ったり、どなったりいい気分になったが、明日は雌阿寒岳に登るので11時頃寝た。部落民達は一晩中騒いでいたようである。何時頃か知らないが、一度ナガシが「一ついかがですか」とやって来た。

すばらしい快晴で夜が明けた。最後の登山なので張切って出発する。登山口の「雌阿寒岳は、現在活動中で前融なく噴火しますから登山はお見合せ下さい。」との看板にびっくり。登山事務所登っていいからさくと、へっちゃらだと言う。それならなぜあんな看板を置くのか分らない話である。

## 雪国の農家にあるもの

二年片山洋

僕はこれを旅行記という自信がない。それでも旅行して書いたものは旅行記だが、より現実問題をルポルタージュニ式に書いてみる。これは僕が一月の五日〜八日に石打、二十一日〜二十四日に浦佐二度スキーに行った時に感じた事である。金のない僕等はスキーに行っても設備の良いロッジやホテルに泊る事はできない。それだから、民宿といわれる季節旅館を利用することになる。それは農家が冬の閑期に経営しているものである。それが営利を目的としたものか、又良心的に金のない大衆スキーヤーへの安い宿を提供しているのかは区別したい。が要は安い宿賃でもマイナスにはならないから相当に儲けているものと判断できるなせなら農家には立派過ぎる程設備が整っているからである。立派過ぎるといっても都市に較べる程のものではない。日本の農村で都会並の住宅の設備、それより都会並の生活ができないかというところ、それは社会の二重構造が原因である。石打、浦佐共に米作一本槍といえる。それも越後平野の中にある地方ではないから大きな農家ではない。石打より田圃の面積が広い浦佐でも多い家で、米が四十〜五十俵だそうである。畑が少々あるがそれは山を切り開いたもので家の食料にしかならないと思う。そして十一月半ばから雪にうもれた毎日が続き、その間の収入は零である。それでも最近スキー客が多くなって季節旅館を兼業にする家が増えてきたから、冬期でも収入が全々ないとはいいがたい。しかし兼業でない家は米が唯一の現金収入源、季節旅館を開こうと思つても家の小さな農家はどうか。仮に家があったとし

山麓が広く、エゾマツ、トドマツの原始林を二時間程行く、まったく人影がなく、熊の心配も出たが、天気がいいので元気に登る。高度千m程の所で視界が開ける。目前に円錐形の雌阿寒岳がそびえ、真下に阿寒湖が見え、遊覧船が走っている。まわりは、広大な針葉樹の樹海がえんえんと続く。本州で見られない光景にしばし見とれる。

旧噴火口の縁に上がり、平地となった山頂を見る。どうも山という感じがしない。我々は物好きに噴火口に近づくと、又もや悪臭に悩まれる。よく見るとダンブカーが3台ある。硫黄採掘のためだが、よく持上げたものである。汗を流し、登った山なのにこんなものがあると、気分を害する事ははなはだしい。突然ドカン！ とものごい音がする。すわ爆発と肝をつぶし、青くなる。あの看板ウソじゃないと思つたが、音だけで煙が出ない。硫黄採掘のハツバの音だった。びっくりさせやがる。ほっとして、道松の中でしばらく昼寝する。4時頃、張りっぱなしの我がテントに帰ってきた。

翌日、天然記念物マリモを見に出かける。見えない時があると聞いて来たので、念のため土産物屋の売りに尋ねると今は見えないという。いつ見えるかと聞くと、一年中見えないと答える。でもマリモ船が出てくるじゃないかと、なじるとあれば、マリモのありそうなので「本日はあいにく、天候の加減で見えておりません」というのだそうだ。随分人を馬鹿にした話だ。時間があるのでポケを見に行く。ポケは泥火山で、白い泥沼の中から、高熱のガスが泡となりポコポコ飛び出す。例によって、物珍らしがりやの癖を出し近寄った。あつという間もなく、片足ズブリと突っこんでしまった。火山灰で真白になった靴で、次の目的地摩周湖行のバスに乗った。

てもいままでの設備ではできないからそれにも相当金がいる。また浦佐の場合、村が浦佐スキー観光株式会社を持っているので、相当の株を持たなければ季節旅館をやる事かできない。石打は民間の大資本の観光会社がバックアップしているのだから株の心配がない変りに、相当の中間搾取があるようである。その証拠にゲレンデには会社が経営する素晴らしい食があるのに、各季節旅館組合会長の経営する食堂がリゾート終点にありますから御利用下さいという貼紙があった。それでも季節旅館を開いている家は、農業による収入よりもスキーヤーが落ちて行く金の方が多いのだ。必然的に女手不足となる旅館には農家の人達が手伝いをしている。それがプラスになっているのも本当のようだ。畜産的に見ても浦佐の家では子豚一四牛一匹が飼われていたが豚は明らかに泊り客の残飯で飼っているのであつて、お世辞にも良い豚とはいえないものだった。そして部落三〜四十戸中飼っているのは四頭だけだそうである。考えられる程のものではない。牛は役牛だが推肥を取るためのものだ。専業農家は豚を飼うには飼料を買ねばならないから不可能だ。だから季節旅館を兼業しない農家は、手内職といつても自給程度のものでしかないから、出稼ぎ、手伝より他に収入はない事になる。夜になると兼業農家が明々と蛍光灯を灯すのに裸電球が見える。風呂もトイレなのに一方はそうではない。政府の農村構造改革が季節旅館と結びついた農家の多角経営であつてはならない。石打からの帰りがけに僕等の泊つた家が蛍光灯で明るいのに反し、その隣家の一つの小さな灯が目についた。健康なスポーツの場としてのスキー場に農家と農家の明暗があるのは事実だ。米単作地帯に畜産要素を広げる意味から畜産学科学生がもっと考えるべきものがあるように思われる。

# 花がとりもつ恋

佐藤

晃(畜三)

ことは伊東温泉と修善寺温泉の中程にある中伊豆という小さな町である。狩野川台風で破壊された農地、道路、家屋の復旧工事もようやく軌動に乗り始め、被災者の顔にも僅かながら笑いが見えるようになって来ていた。一人に近い土工と数百台のダンブカー、そして大型トラックで中伊豆一帯は、ときならぬ人間と大自然との戦いが開始されていた。

午後の二時を少しすぎた頃、遊びづきの七、八人の土工達が焼酎の香りに誘われて、付のきく南京食堂にどやどやと入って来た。すでに定食を食べに来ていた県の職員らしき、四人連れの隣りには、これらの人達とは全く違ったタイプの客が二人坐っていた。

一人は頭の禿げた瘦せこけた五才位の男で印象的ではないが、その態度や服装は全く上品である、もう一人は明らかにその娘で、年は二十才位に見えるがその簡素な服装は目鼻立の美しさや、見苦しくないおぞおとした行動と良く調和していた。二人は食事を待っている間、低い声で話しをしていた、その簡単な言葉や突然の歓声などを聞くと、彼等は伊東を経て修善寺温泉に行く途中、始めて眼にした台風の惨状にすっかり同情、何気なくバスから降り、その足で昼食をとりに、この食堂に来たのである。二人はこの小さな町の台風による惨状を彼等自身の物静かな態度でじっと見ているように思われた。娘はどこで入れたのかカスミレの花を大事そうに揃えて、しおれかけたのを元気づけてやる為に、飲み残しの少しばかりの

れない」「ああなんて甘いんだろう」。

この二人がまだ盛んに飲み、しゃべっている最中に、父と娘は二言三言呟いて出ていった。食堂を出てから娘はコップの中に花を忘れて来たのに気がついたが、敢えてそれを取りに戻ろうとしなかった。

「何という事だ、あの青年達の態度は……」  
と父親は強い口調でいった。

「最初のうちは落着いて食事が出来ると思ったのに……」  
「私はおいしく頂けましたわ」と娘は答えた。父親は身震いしたが、娘はそれほど嫌なものには思えなかったようである。父親は酒もタバコも飲まなかった、そしてむしろ酒やタバコを飲む人達を軽蔑していた。

父親は勝又藤十郎といい、その娘は由貴子という名前であった。父親は八芝電機株式会社の子会社という地位にあった。年令のわりに出生の遅い方であるが、これも彼の己の殻に閉じこもる性格が災いしているようである。彼の収入はそれほど多い方ではなかったが、常に地味な生活をしているので私有財産は相当持っていた。彼は社会上の自分の地位というものに対して常に気をつけており、又非常に世間体を重んじ、彼の為にも娘の為にも、彼等の周囲には口喧ましかつた。彼の父親も又その兄弟達も実業家として御功していたので、余計彼は体面というものに神経質になっていた。彼は自分の身分以下の待遇を受けることを絶えず恐れて、人との交際を出来るだけさげよとしていた。反面内心では非常に野心にもえていた。

二人はこの中伊豆を経て修善寺温泉で一泊して翌日帰る予定のようであった、バスの停留所に着くとベンチに腰掛けた。父親はバスの時間表の下に提示してある自衛隊員募集のポスターに批判的な

水が入っているコップの中に挿した。二人が注文したチキンライスを持って、この店の看板娘がやって来るのに気づくと二人は黙った、そして、女が去ると互いに顔を見合せてから食べ始めた、二人が食べ終るか終らぬ内に店の入口の方に陽気に鼻歌を歌う男の音が聞こえて来た、二人は髪の毛の長いどう見ても風采のあがらない一人の青年が入って来るのに気がついた。

青年は急いで歩いて来たものと見え、顔を赤くし、額いからは汗を流していた。手には色褪せたカバンをさげ靴は埃りだらけであった。そして彼は食堂へ入って来た時に、「こんにちは」といった。しかし、彼に挨拶をかせそうとする者は一人としていなかった。父と娘は血に目を注いだまま彼を無視していた。青年は何気なく娘の方を見た、そしてこっそり盗み見す盗み見するたびに、彼の無骨な顔には何か動揺と悩まげな物思いの様子が現われていた。彼は黙っている父親の方を見たが、それは軽蔑的な眼であった。

間もなく又一人の客が入って来た、それは小柄な中年の農民で疲れていると見えて丸椅子にデンと腰をおろし焼酎を注文した、さきほどの青年はこの農民と急に話しを始めた。彼等の話題は焼酎である、この地方で作られる力正宗という焼酎はなかなか味が良い事に彼等の意見は一致した。そこで青年は三杯目の焼酎を、ものみごとに飲みほした、そして農民は三杯目を、青年は四杯目を各自注文した。

二人は声を揃えて「もしもこの地方に焼酎が無くなったなら、自分達は元よりこの町で働いている一人人近い土工達は、一体何の楽しみを持てるだろうか」といった。

「この見事な飲み物を嫌ったり、薄めたりして飲む人達の気が知

眼差を向けてじっと見入った。娘は洋傘の先で、さきほど忘れて来た花を恍惚とえがいていた。すると誰かが近づいて来て彼女の直ぐ前に立った、彼女は吃驚して見上げると、食堂で会ったあの青年であった。「あなたはこの花をテーブルのコップの中に残して来ましたね……、失礼かも知れませんがうっかりお忘れになったのではありませんか……」青年はその花を手を持っていたが、花は紙切れで注意深く包んであった。彼女は暫くの間返事が出来なかった。彼女は相手の男を見ていた、そして頬が燃える様に熱くなるのを感じた。「まあ、ありがとうございます。私忘れてしまったのでございますの、本当に御親切に」彼女は自分では何を言っているのかわからなかった。花束を受取る時、彼女の手は彼の手に触れた、そして僅かな震えを隠す事は出来なかった。青年は花を渡すと「では……」と言って立去っていった。父親は少しもこれに気づかなかった。娘は興奮から覚めると笑いながら父親の前に行き花をさし出して見せた。

「私これを忘れて来ましたでしょう、そうしたらわざわざこれを届けに来てくれましたの」、「それは大変親切な事だ」と父親は優しく言った。「そういう心尽しは励ましてやりたいものだ。近頃では珍らしい」と父親は花を届けてくれた人が食堂でのそうぞうしい青年であることには気がついていなかった、いかにも感心したという表情を満面に浮べていた。それから五分位経過後、砂埃りをあげて修善寺温泉行のバスが来た。二人は四、五人の客と共にバスに乗った。修善寺物語で知られる温泉場についたときには四時を一寸と過ぎていた、バスから降りると番頭が迎えに来ていた旅館に案内され部屋に到着と暫くして女中が入って来た。

「遠路ようこそおこし下さいました。粗茶ですがどうぞ……」女



体操に参加する資格を得る事が出来た。俺の心はおどった、もう少しだ、字を書きさえすれば、あの集団部屋に入れてもらええる。そうすれば、俺の脱走の機会も来るのだ。

俺はこの集団部屋に入る事三カ月の歳月を費した。この頃になるともう、俺の決意も少しづつ鈍ぶって来たが、あのずるそうな親分の顔、そしてすべすべして一つ一つが生きものの整に柔かく手のひらに余ってはすむ女の白い乳房、肉体を思い出す度に決意を固めた。そして冬が近くなって陽の短かくなった十月二十三日俺は遂に、綿のはみ出たうすい蒲団から、俺の背を越えてまだ二米近くも余っている固いレンガの塀を越えて、夜露に濡れた畑の中に俺の自由への第一歩を踏み出した。自由などと、そんなインテリぶった日本中の偽善者共を一カ所に集め、俺は君たちの幸福の為に、平和を、自由を念願している等と言うそんな大げさな自由の意味するものが俺の行動ではない。

あの赤いレンガの塀に囲まれた建物から、川があり、畑がありそして人間だけの持つ愛情を連想させてくる、あの明るい灯さえも、人待ち顔で待っている。この荒々しい自然に飛び出しただけでも、俺にとって自由と呼び

たい気持ちなのだ。

だが、次の瞬間にはもう、俺の行く所はないと言う絶亡感が俺の気持ちをうめつくしている。これ程広い広大な土地にさえ、一個の人間の落ち着ける場所は無いのだ。この附近の家々には、あの猿の躰な看守が世界中で最も凶悪な犯人が脱獄したと言った家々の戸口を、さも深刻そうな顔をして廻っているだろう。そして俺は一躍この附近の民家の英雄になつてはいるはずだ。

俺に手錠をかけた警官の様な感情はない。世の中の人間を信頼出来ないと言った非情な目をむき出しにして、そんなら俺は誰からも省みられない、俺はこれからどこへ行けばいいのか、父はあるが俺が小学校一年の時、となりのキュウリを盗んだ、とか言つて兄弟中で最もお前は馬鹿だとか、近所中につつぬけの大声を張り上げて、裏の梨の木へ俺をしばりつけた父を知っているが、そんな所に俺の帰る所はない。

俺は急に空腹を感じた、今まではそんな事を考える余裕もなかったが、あの白い自動車に橋の上を走り去つてから、急に自分のしている事がばかしくなつて空腹を感じた。ともかくも、俺は家の灯を探して、闇をみつめ

十月つきささる様な冷たい水から田んぼへとはい出した。

その畦道が蓋きた所が丘になつていて林を透かして灯りが見えた。

俺の頭はその灯が食物を置いてある一つの食卓と見える外は何の危険さえも教えてくれない程、単純になつていて、と言うより危険を感じる程、俺の空腹は余裕を持っていなかったのだ。

寒さが、濡れた下半身を襲う中を俺は倒れる様にのろりと歩くと丘を登つて林を通つた。急に運動場に出た。そこが学校である事を知つた時俺は落胆した。何故か俺は学校が嫌いだった。

中学校さえもめつたに行かなかつた。先生には反撥し、勉強もしなかつた、そしてあの点数の良い答案を渡されたからと言つてそれを鼻にかけ、人をいつも見上げている優等生とか言うものが、俺には嫌いだった。それでも老いた教師の説教の一つも言い、俺の将来のせいにして、自分の組から落第生を出す事を恐れ、校長の気嫌を見計つて俺に卒業証書を渡してくれたものだ。それから俺は学校の前を通る度毎に舌打ちして通る程、あの、ツンと澄ましたインテリ顔を見るのが厭だった。

奴等は人の金で本をよみ、勉強する事が楽しみだ、等と心にもないお世辞を言いながら、他人の成績を気にして友達が一点でも悪い点数を取ると口では慰めて言つて心では安堵と喜びの感となつて居る。他人の出世をねたみ、互に心ではさぐりあつて居る、それがインテリと言われるもの達の衰れた姿だ。そのくせ、一步学校を出ると、学生である事を必要以上に自慢し、鼻にかけて居るのだ。それに俺を見る彼等の目の冷たさ、そこには人間の暖かさなんて少しも感じる事も出来ない、そう思つて俺は奴等を見て来た、彼等を見る度毎に、俺の卑屈な劣等感深まるばかりであつた。

俺は今日、俺の重大な、この危機に学校に出合つた事が悔んだ。しかしどうにもならなかつた。今はもう、この観念よりも食物を得る事の方が俺に与えられた急務である事を知つて居た。それにそこに立つて大きないかめしい威圧感を与える建物をながめて居ると、はるか向こうの方でサイレンの音がするのだ。

俺はもう観念してその厭な建物の右側から入つて行つた。そこは学生の寮になつて居る様であつた。

食物を探すのが俺の目的であつたが、数カ

月振りで、人間の住家が俺には又恋しくもあつた。しかしそこが俺の最も厭なインテリぶつた者の住家であると言ふ事は俺に急ぎこ

んで進む事の出来ないためらひを与えた、それでも外から見た建物にずらりと並んだ電燈の灯は何かしらその中に奇跡でも待つて居るかと思われ程そこには人間くさみが充満している様であつた。建物は異様な静けさの中に時間だけが自分の義務を片づけていく。俺は急にサイレンの音が高く鳴つたのを聞いた。とたんに横の木戸を引き開けて部屋に入った。部屋は隅に螢光燈の光だけで、一人の人間を浮き上らせていた。

机の上に置かれた、白い紙包は俺の空腹を激せるには充分であつた。

俺はだまつて立つた。一瞬、その男は、はじかれた様に俺の方を振り返り、奇妙な、あのさげすむ様な目で俺の身体をなで回すと急におびえた顔で恐怖の色が急に現れて青くなつて来るのが解つた。

俺は勤めて静かに、

「腹が空いて、たまらないんですが、何か食べる物があつたら下さいませんか。」と俺は始めて敬語を使った。

その男は、人の部屋に無断で入つた事をと

がめる事を忘れて、

「な、なにも有りませんよ、で、でで行つて下さいよ。」

急につき離す様におびえた口調だった。俺は又、あの偽善者の魂を見た様な気がした。

あの人間の寄せ集めるキャバレーでさえも、やたら長の字を並べた名刺を振り廻すあの男と何等愛りは無かつたのだ。

「でも、何か有つたらお願いします、決して乱暴を働こうと言ふ訳では有ませんから」と必死になつて言つた。心から真剣だった。

「いえ、何も、何も無いんですよ」とその男は無理と言ふ事が口ぐせであるかの様に主張した。俺には、お前なんかにはやるものは何も無いと言ふ様に聞えて、急に腹が立つて来るのを無理に押えると再び暗い廊下に出た。もうどの部屋にも入る気がしなかつた。

すべてが外見だけで物を見つめる平凡なあまりにも動物的な人間達の集りに参加する気が無かつたのだ。出世と損得がたくみに計算されている人間の頭脳に俺の入る余地はなかつた。

俺は所々、ガラス窓の破れて冷たい風の吹き込む廊下伝いに逃げる様にして校舎の方へ走つて行つた。時折、つるされて居る裸電球

の下を通った。

もちろん、夜の校舎等通る人として居なかったのが、能分た身に附随する罪の意識は、意図せずして、自然に俺の身につけてしまっていたのだ。

三つ目位い廊下を通って廻り角に、扉が少し開いて中では白々とした螢光燈が白色の光を放って夜の人間の住家を形造っている室があった。

中から、相当年配の背広を着た白髪の中がのぞいていた。

俺は急にその部屋に入るとすべての人間が、自分に迫った危機をかきわけける本能。それをもって古びた部屋を見回すと俺の来る所ではない、と急に味けなさを感じて帰ろうとすると「君だれだか知らんが、人の部屋に無断で入って、そのまま出て行くなんて失礼じゃないかね」と警官が使う様な言葉が俺の背後にあびせられて、俺は振り返った「はあ、特別、何も用はないんですよ」

「用が無いって、君、人の部屋に入って用が無いって、そりゃ、人を侮辱している事だよ、人間なんてそんなものじゃないんだ、信頼と信頼が結びつく、そうして人間が生まれているんだ」彼の話は続いている。

しかしあの学を鼻にかけて、宙に浮いた、理想論をのべ、自分の言葉に酔う、そう言ったインテリの一例を俺はここにさぐり立って、何の魅力も感じなかった。

魅力どころか、それに他人に対して何の感化も与えない、その理論は自分の快楽の爲であり、他人に対する愛情の一カケラも無いのが常であった。この廊下の隅にも、彼等の仲間一人ころがっているのだ、この様な人間の林、森、これが俺の生きている世界かもしれない。

彼の話はまた続いていた。

「……そこでだよ君、何億と言う莫大な人間の住む世界だよ、その莫大な人間がだよ、一粒のごはんを無駄にしないとすりゃ何石の米が浮ぶと思うんだい、一円のお金を節約してごらん何億円の金になるんだ、君、経済だよ、歴史を動かすのは経済だよ……」

しかし俺にはそんな関係のない事であった。一人の人間が世界中の人間が一粒の米を節約する事も出来ない事であったし、一円の金を節約する事も出来ない事じゃなかった。

そんな理想論出来そうもない空想を考えるより、一切のパン、太った女のあの太腿が俺には欲しかった。

俺はそっと部屋を出ようとした。

「君聞いているのか、私が真面目に話しているんだ、真面目に聞くのが常識だよ、聞いていたのかい、君……」

「ええ、聞いていますよ。」

聞きたくない話を傾けるのが現世の常識なら、嘘を言って相手を喜ばすものも現実の常識だろう。

自分の喜びの爲に、他人を軽べつする事によって人世を楽しんでいる様な人間の犠牲になるものももう沢山だ。

俺ははげしくドアを叩きつけてそこから飛び出した。

もう俺は自分の為すべき事が何であるか、何をなすべきか俺は脱走と言う大罪まで犯したのか、一刻一刻と緊迫する中ではこの複雑な考えをまとめる事は出来なかった。

これ程までに、食物を得る事に苦原し、自分の住家を見つめる為に走り回りをして、自分の社会的地位と言う権威に自分の身をかくして、他人を欺く事に自分の半生を暮し、目を光らせて、自己の快感を求める者の犠牲になり血だらけになって明日のパンを争う現代の社会に、法則を犯す以外、俺の生きる道はない。

こんな世界に出ているより、麦飯でも良い、明日の食事が約束され、自由と言う事を忍び

させれば、生きていく事の出来る刑務所をれさえ、なつかしく思い出されてくるのだ、生きると言う事、食物を得ると言う事はいかにむづかしい事であるか、自由を求める為に死を選んだと言う幾多の古人、しかし彼らには、生活の手段、明日のパンを得て、その後自由を求めたのであろう、しかし現代の人間は、自由を求める以前の段階、即ち明日のパンを求めなければならぬのである。生きなければならぬと言う事が俺の身につけて今程、切実に考えられた事はなかった。

明日の食事、いや、今の食べ物を求めなければ、俺は何をする事も出来ないのだ。

腹の空いた。俺に俺にとって自由、信頼、愛情、と言う念仏は、一切のパン程の価値さえなかったのである。俺は始めて脱走した事に後悔を感じた、俺の今いる世界よりもあの使い古びた建物の方が良かった。

それに今、俺にはこれまで以上、又あの建物にとじ込まないなければならなくなるだろう。そうすれば再び自由が欲しくなるのだ、毎日毎日、定った食事を与えられると、食事をさえなかつた事を考えず自由を求めて脱走す

るのだ、それが俺であり現世に生きている人間の切断面でもあろう。俺は足を引きずる様にして、校舎のはずれまで歩いて行った。

そこに電気の光が目に入ったからである。俺はその灯の前に立った。

部屋は黒い。すくすくぶつて四角ない。ろり

では真黒いやかんが煮立っているのが、ぼろぼろの障子からすかして見えた。

廊下の裸電球から小使室と言う字が読み取れた。

さつき俺が入ったあの螢光燈の部屋、立派な机のあった二番目の部屋から比べるなら

ば、およそ、人間の住めるとは思えない程荒れた部屋であるがそこには人間の住んでいると言う事を代表している暖かさがあつた。立派な机もなく螢光燈さえもないのに、

「廊下にいるのは誰かね、この寒いのに、部屋に入ったらどうかね」

障子の陰から老いた人間らしい声がした。

部屋からは味を汁の匂いがしていた。

そこに引かれる様に俺は障子の前に立つと

「入った方がいいよ、外は寒いだろう」

「おじさん俺が誰だかわかるかい」

「知らんね、そんな事はどうでもいいだよ、寒い時にゃ、暖かくなるんだ」

「おじさん俺を部屋に入れると後で後悔するよ」

何故か、俺はこの人だけに本当の事を言いたくなっていた。

「後悔だって？」「そんなむづかしい事は私にゃわからないさ、本もまったく読んだ事もないんでなあ、だけど、寒けりゃ入って暖かくなつた方がいいだろう」

俺は急に甘まえたくなってくる気持ちをととこらえて、障子を開けて所々、こげた、畳の上に座った。

「おじさん。俺、腹へっているんだけど、何か食べる物、ねえだろうか」

「ああ待っていない、今ごはんを暖めてやるからな、そんなに濡れてどうしたんだ」

「おじさん幾つになるの」

「わしかい、六十幾つかになっているはずだけど、はっきりとはわしにも解らねえのさ」

「おじさん、俺をどんな人間だと思ふ、おじさんは俺を部屋に入れたので後でひどい目に

会うかも知れないよ」

「お前さんがどんな人だつて、そんな事はどうでもええよ、寒い人を暖めて悪い事はあん

めい」

「でも……おじさん……」

「いいよそんな事は何でも……見りゃ、まだ若げえんだ、これから大変だろう」

俺の胸の辺が熱くなって来るのをどうしようもなかった、世の中に、こんな人もいるのかと、俺は俺の気持が生れて始めて柔いのでくろを感じていた。

「おじさん一人かい」

「うん五年ばかり前連れ添いに死なれて、息子は田舎で学校の先生をやってるよ、だから今は一人ぼっちの毎日だ、こんな事を考えるとも私も悲しくなって来るだよ」

「おじさん悲しむ事ないよ」

「これからは若いもんの時代だってよ、これからはお前さん達に働いてもらわなきゃなあ、ごはんも温まったらう、味を汁もあるよ、たくわんもだ、うまくないが沢山食べな、食べる、うんと働くん」

「おじさん」

「うん、なんだ」

「うん、何んでもないけど、ありがとう」

何の言葉も口に出てこなかった、素直に有がとう、と言ったのは何年前からない事だった。

熱いごはんを見ていると目が熱くなって来て仕方なかった。

俺は静かに立ち上った。

「どうしたんだい、もう食べたのか」

「どうも、ご、ごちそ……」

そこまで言うのと急に俺は泣き出して障子にすがりついた。

この時人間の愛と言うことが、俺の身に始めて感じられたのだ。

美しいと言う言葉を始めて思い切って使っ見てなくなる。あの人の心、それにむくいる俺の行為、俺はもう、どうする事も出来なかった。

お札を言うのに、それは、あまりにも少なすぎる報酬だ、刑務所に俺が返って行く、それではあまりにも無残な裏切りだ。

「どう、したんだい、もう帰るのか」

苦しいと言う、悲しいと言う、複雑な人間の心理と言うそれが始めて俺に感じられた。

俺の事を心から考えてくれる人に対する、俺の返事が今告げられ様としている。

さっきの学生か、白髪の背広姿かが、電話したのかも知れない。

でも、そんな事は考えの隅にちらついたただで、頭には浮んでこなかった。

俺は引っかく様に障子をあげ様とした、しかし障子は甚々しく外側から開かれた。

「おじさん、俺……」

刑務所を脱走して来たとはどうしても言えなかった。ごはんは生れて始めて食べた様にうまかった。

「何んだい、だまって、下を向いたまま、何か困った事でもあるのかい」

「うん、何んでもないけど、いい人だなあ、おじさんは」

「いい人だって、わしが、そう言ってくれるのはお前さんだけだよ、わしがいい人だったら世の中の人はみんないい人だよ」

俺は急におじさんの顔を見た、白髪が少し残っている、ごつごつの顔ひげだらけのあご、目がずつと奥の方にへこんで、そこから暖かい光が出ている様に、じつと俺を見ていた。

俺はそつと目をおさえた、涙がひとりりで、ほほを流れて仕方がなかった。

ごはんがのどを通らなかつた。半分かじられた、たくわんが、熱く湯気の出ているごはんに乗っかっていた。

「早く食べな」

俺の気持ちはもうさっきから荒々しい気持はとうに消えていた、ともすると脱走して来たのだと言う事さえ、忘れてしまふ事があつた。

「五郎君だね」冷たく男は言った。すでに俺の手首にはあの冷たい輪がかけられていた。俺はがっくりと頭を下げた。

そして静かに後を見た。

おじさんの目はじつと俺を見つめていた。裏切られた怒っている目ではなかつた。信頼と愛情、その言葉があてはまる暖かい目だった。

——いつまでも君の行末を信じるよ——

そう言っている様にその目は俺を見つめていた。

「さようなら」  
そう言うのが俺には、やっとだった。たった数十分の間俺の気持はこんなにも変っていたのか。

「行きましよう」

と黒い服の警官は言った、俺は静かに歩き出した。

又あの冷たい入口のない部屋へ帰る、しかしそんな事を俺の心はそれ程苦にしていな

い。さっきから、俺は、俺の生れた時の心に帰ったと信じている。

真面目になるのだと、立派に刑期を果して、又あのおじさんに会うんだ、今度は、人間らしい恩を返すのだと、さっきから俺の決

た。俺の耳にふたたびけたたましいサイレンの音が聞えた。

そのサイレンの音に俺の心は動揺した、しかしその動揺を外面には表わさなかつた。

「何だろうね、今時分」

そう言っ静かに顔を上げた、しかしその目はさっきと何等変らず「癡」を知らぬ柔らかな光を放っていた。

「おじさん」

急に俺はこのおじさんにすがりつきたくなつた。この人にすべてをまかしたくなる様な、衝動にかられて、おじさんを見すえた。

「おどろく事はないよ、さあ、ごはんを食べな」

やがてここに荒々しく警官の泥靴が入り込んで来るだろう。この神聖の場所に、俺はともそうさせる事は忍びなかつた。

サイレンの音が再び、俺の気持を以前の動物的な気持に返そうとするかの様であつたが、今の俺には、以前の気持にも、もう返る事が出来なくなつて来た。

……ここに警官を入れる事は出来ない……

無意識の内に、そう考えると俺はそこにもう

一刻もいる事が出来なくなるのだった。

荒々しい足音が廊下の角から聞えて来た。

心は変らなかつた。

学校を出て、冷たい闇に触れると増々はそれを強く考えた。

門の所に白い自動車俺を待っていた。

学校を取り囲む、杉の木末には星屑が集つて今晚もさびしく天の川を作っていた。

俺を乗せた車は静かに闇の中へと消えていった。

俺の目にはふたたび涙が流れていた……。





朝のすみれ草

すみれ草は

とっても可愛い私の恋人

今日のすみれ草は悲しそう

夜つゆにぬれて首をかじげている

青空より美しい小鳥が降りて来て

小声で鳴いた

私は可愛いすみれ草にそっと口付をしたのだ

すみれ草は春がそこに来ているのを知り

喜び、又笑顔で太陽に向って元気な

微笑を見せた

今日の祈り

身にしみる今日の朝

顔を洗いに階段を降りる

矛盾なもの朝を祈り

朝食を得る

今日の朝は美しい

身も心の清潔に

過去を美しくしてくれる

そして満足感を与える

今日一日暮れゆくすでの

無事を祈り夢を見る

今日の朝の空は強く

我等の青春を

祈り微笑み見送って

くれているに違いない

せせらぎの音と距離あり今日の月

そば刈るやはりくる乳房を子にひろげ

幸と光りここに創り今日の月

堀 宏 充

茂原分校移転について

私に畜友会の役員から茂原分校の統合の件につき何か一筆と依頼を受けたのはあるが、私自身まずこの問題を十分に把握出来ていない状態でもって筆をとらざるを得なかったことを、まずもってお断りしておかねばならない。

一応この問題が浮び上ってきた起因、歴史から紐解き、問題点を投げかけてみようと思う。分校合併の問題の発端は、昭和三十三年六月二十一日に茂原分校学生自治会の開催した臨時学生大会でもって全会一致のもとに、「本校への合併を決議するとともに、決議文大会宣言を発表した。その理由として次のようなことを謳っている。①実験などの設備の不備、②実習における施設の不完備、③図書館、体育設備、保健衛生施設の皆無に近い状態、④教授陣の不足及び怠慢、⑤教務の無理難題、⑥視聴覚教育の重要性の無視、⑦立地的条件において地域の不便、⑧対外的交流の不便、⑨健全娯楽の不足、⑩精神的な面での本校生と差別の問題、⑪本校との接触の極少、⑫分校という劣等感、⑬分校の存続性に対する不安、⑭募集要項と現実の不一致等々である。

しかし分校の合併問題が当時ここまで盛上ったのは自治会が行なった全学生を対象とするアンケートであった。それによると、茂原分校改名についての設問に対し、七十五%が賛成し、学内施設についての設問に対し九十八%の学生が不足を許している。また付属研究所については九十四%の学生が不足を許え付属図書館については九十三%の学生が同じく不足を許え、講義内容については九十一%の学生が不満の意を表明している。

この資料を基として、前述した学生大会が持たれ、その席上、二十五名による合併交渉委員会が設置され、交渉運動資金としてカンパを行ない一人あたり百円を集めることを決定するとともに、早くも署名運動に乗り出している。そして交渉委員が本校の自治会に協力を申し入れ、六月下旬には本校の自治会でも協力体制に入り、九月にはパンフレットその他でもって全学生に訴え、茂原分校合併問題は、全学的な問題に一気に押し上つてきた。当時の学長千葉三郎先生も同年十月にこれを全面的に受入れ、後はどう合併を進めるかということになった。

そして私達畜産、拓殖の二年生から本学で

学ぶことになり、三十四年度の九月の試験後本格的な移転に乗り出すとの基本的態度でもって進んできたのであるが、三十四年六月の学長選挙で千葉先生が敗れ、三浦肆政松先生が新学長に就任されたため、経費の問題などで大きな狂いを生じたが、基本的路線は崩れず移転は今春まで延ばされてしまった。しかし当初移転に際しては学生には少しの犠牲を及ぼさない。茂原の設備以上のものを準備した上でこのことと今まで伸び伸びになっていたにもかかわらず、畜産科の場合は、旧講堂を区切って当分の間研究室とし、拓殖科の場合は、新築なった教室の一つを同様に利用することとなっている。一応学校当局は十月中に農学センターの第一期工事の完成を約束して、それまでの応急措置としているが、まだ実のところ資金面の調達すら終わっていない状態である。

一応以上が「茂原分校移転」に関する歴史的な概略であるが、現在この問題が学校理事者との約束が交されてから二年以上になつていっているにもかかわらず、多くの問題を含んでいる。それというのは当時学生が問題としたのは当然としても、理事者側は当時、分校の年々の赤字に悩まされ、いずれは何かの手を打

つ必要があった時期に当面していたことを思えば、学生からの要求をよむことに、一気に踏み切ったことが十分考えられる。しかし当時畜産、拓殖の先生方は一般教養の二年間を本校で、後の専門課程を茂原分校でと考えられたそうだが、それが何ら考慮されずに統合決定に踏切ったことは、学生の意志を汲むということを装って経理面の解決が先走ったことが考えられる。だが分校農場長の石原先生の言には年度の会計で初めて黒字が出たそうであり、十年間の汗水流した苦勞の土地から離れることを残念がっておられる。

問題は我々畜産以上に拓殖の方が深刻である。というのは彼等は農場の実習が何を置いても先ず考えられない農業技術後移民をその対象としているからである。

さしあたって本年度の畜産実習は茂原分校で組まれており、大家畜の飼料は従来通り今年度は保存することである。しかし何れ新らしく購入した厚木新農場へ分校農場の移転が行なわれることは確実であり、その場合理事者側は十年あるいはそれ以上の期間を要して行なわれる計画のようであるが、学生は四年間の勉学、研究期間を与えられるのみであるから、その間に移転の過度期だからとい

って学生に対して辛抱しろとか、少々な犠牲はなどとは全く道理の行かないことといわねばならない。出来るだけその限りにおいては農学センターの早期完成も、新農場の早期使用を可能ならしめるよう負債を背負ってでもやっていたらきたい。

またこの茂原分校移転問題は畜産学科、拓殖学科のみ問題ではなしに、農大の七十年の歴史の上において統合するのであるにもかかわらず、農大一般には別に問題とする兆が伺われないのは残念である。これは本校の自治会がまるで他人事のような態度をとったことを第一に指摘せねばならない。しかし反面分校の合併が約束されるや、合併交渉委員会がそれにて解消してしまった状態となり、それ以上に発展しなかったことも、合併が現在のような形でしか行かない大きな原因として指摘せねばならない。それだからこそ逆に去年一時は分校の学生が反対を叫び出すという原因をも生んだのである。

いまこうして一ヶ月後に移転が行なわれようとしているにもかかわらず、まだ殆んど何も手をつけていない状態を見ると、全く戦時中焼け出されて他人の家の厄介になりに行くような感を脱しえない。

時代の趨勢にのった感のあるときだけに、畜産、拓殖とも大いに発展さすよい機会である。それを本校合併という一契機を有効に利用して発展的に分校の解消を見なければならぬ。そこに例え短期日の間においてもマイナスイ面を出すようなことがあつては絶対にならない。この本校統合ということが農大七十年の最大の行事であり、これを正しく行なえることよつてのみ農大の歴史は続きうるものと思う。そのような面を極めて当の畜友会の任務も大きいといわねばならない。

(滝川昌宏)

× × × × ×

× × × × ×

研究室だより

畜産製造学研究室

四年 渋谷 留雄

- 「四ヶ年間の学究の結果ともいえる卒業論文発表会も終え、立派な先輩諸君を社会へ見送ることが出来た。参考のために本研究室先輩の卒業論文題を述べて見ると次の通りである。
- 「千葉県に於ける市販牛乳の品質について」
- 「鶏肉ソーセイ製造に関する研究」
- 「ホルモンサイオラシール処理鶏(中雛)肉の変化に関する研究」
- 「鶏肉大胸及び腿筋の肉漿蛋白に関する研究」
- 「牛乳の遊離アミノ酸に関する研究」
- 「乳脂肪の自動酸化に関する研究」
- 「鶏肉の遊離アミノ酸特にグルタミン、ヒスチジン、チロシンの含量と消費について」
- 「鶏肉のVitaminAに関する研究」
- 「抗性物質耐性乳酸菌に関する研究」
- 「鶏肉の防腐に関する研究」

- 「白色レグホン種鶏肉の遊離アミノ酸の消長について」
- 「鶏肉のホルマリン反応に関する研究」
- 「実験的牛乳防腐に関する研究」
- 「植物蛋白添加ヨーグルトに関する研究」
- 「鶏肉燻煙加工時の燻煙成分吸収について」
- 「鶏体の部位に依る脂肪組織の理化学的性状について」
- 「原料乳の鮮度保持に関する研究」
- 「白色レグホン種体脂肪に関する研究」
- 「鶏肉の塩漬に於ける塩化ナトリウムの集積について」

以上の様な研究テーマであるが、これらの研究は、これで終った訳でなく、未だ解明されていない点もあることだし、これからも続けて解明して行かなくてはならない課題であろう。

畜産製造学は未だ未だこの他に数多くの分野がある広範囲な学問である。

充輩を送り出し、理三年生の正研究室々員は十七名であるが鬼原先生指導の下に更に今後大いに基礎及び応用研究に力を注

ぎ有能なる製造技術者たらんと意気込んでいる。

これからは畜産学科も一年から四年迄共に学ぶ訳であるから、大いに製造方面を学ばんとする諸君を歓迎致して居る。茂原から移転して来たばかりで何かと不便で、製造、実験諸設備の不備の点、考えられるが研究室々員が共にこの不備の点を克服して進む意欲をもたなければならぬと思う。

養鶏研究室

四年 佐野 信夫

養鶏研究室の今までの沿革、内容については、先般、この誌上に載つたので、ここでは主に、現況について述べることにする。養鶏研究室の運営は学生が無報酬で労働を提供するかわりに、本室に無料で住み込むことができ、飼養管理に当たっているのである。本室においては自分の好きなテーマに基づき研究することができるとともに、実際に養鶏業を営むに当り必要な理論をも学ぶことができる利点がある。だから本室に属した卒業生の中には、実際に専業

養鶏を営んでいる人が多いのが特徴である。現在、本室には、今春、卒業する学生も加えて十人属している。そのすべての学生が本室の鶏を用いて卒業論文を書き終え、あるいは現行している。

本室はあくまで研究室であるので、飼養方法はバター飼養、ケージ飼養、あるいはトラックフレスト付きの平飼い法もあり、その研究の目的、方法により選ぶこともできるのである。また、実際に種卵をとり孵化作業も行っている。

最近、卒業論文の実験として研究されたテーマには、「辛子油粕の飼料価値についての研究」「動物用 De-feed 投与による孵化、産卵及び育雛に及ぼす影響」「育雛、産卵に及ぼすホエー（乳糖）の効果」「ケージにおける飲便の原因」「抗酸化剤の育雛、産卵に及ぼす影響」「ペニランの効果」「糖蜜及び U・V・K の飼料価値」「T・D・N 方式 C・P・R の比較」などである。最後の「T・D・N 方式と C・P・R 方式の比較」については、現在継続中ではあるが簡単に説明する。最近、養鶏飼料における C・P と生産カロリーの比較に関する米国の研究が数々、誌上に発表さ

れ、わが国養鶏界においても諸種の反響があらわれてきたが、まだ確かな実験の成果は発表されていない。雛の発育、殊にプロイラーの部門に於ては諸実験が行われているようであるが、産卵鶏に関するものはあまり発表されていないので、この実験に着目したのである。この実験の目的は、産卵個数、産卵量並びに卵重、飼料効率などについて如何なる差が生ずるかを観察し何れの飼料がよいか、その大づかみなヒントを得んとするものである。この実験の方法は T・D・N 区 (C・P・R 45) それに粗蛋白質一定の C・P・R 区は高 C・P・R 区 (1,000 Col/b) 中 C・P・R 区 (900 Col/b) 低 C・P・R 区 (800 Col/b) の三区に分け、各区二十羽にて試験をする。現在のところ、まだ、実験中であるので、確実なことはいえないが、現在までの結果では、厳寒期は高 C・P・R 区の成績がよく、秋では大差が見られない。こうしてみると冬には、維持カロリーが春秋に比べて多く必要とすることがわかる。

### 家畜育種学研究室

四年 池田 孝温

家畜育種学研究室は従来家畜育種学、繁殖学研究室という室名であったが、本校移転により家畜繁殖学が分離して、家畜育種学研究室となる。家畜育種学研究室は鈴木教授、田中講師、渡辺助手の指導の基に種家畜育種学に関する学問を追究すべく歩んでいる。この目的達成の為に

- 一、週一度の研究談話会の開催
- 一、年二回研究室報の発刊

一、関係施設の見学並びに学会等の傍聴等々を励行しているが、本研究室の研究の中心を為しているのは、家畜の分泌物の研究により、家畜の体質を知る事にある。これは家畜の能力はその家畜の体質に關係すると云れている事に起因する。本研究室をより良く理解して頂く為に、実験テーマを掲採してみると次のような物がある。

「鶏における抗体の移動について」「鶏の産卵性と血液型の関係」「鶏の血液型の遺伝について」「鶏卵の孵化並びに育雛に及ぼす静電気の影響」「山羊分泌物の血液型学的研究」「山羊の分泌物における血液型物質の血清化学的性状について」「牛初乳中の牛の分泌物の血液型学的研究」「牛初乳中免疫性蛋白質の膾えの移行に関する血清学

的研究」「実験動物におけるビタミン A の研究」等々がある。

家畜育種学研究室の構成は本研究室に属する教職員、本研究室出身者並びに入室手続を完了した学生によって、成立しているのであるが入室者は三年次迄に手続きを経なければ入室出来ないのご注意して下さい。

### 獣医研究室

四年 上田 貫一

畜産学科附属施設として家畜診療所がある事は前の畜産研究室便りに獣医研究室担当の平山先生が挙げた通りである。獣医研究室「獣研」の一部として診療以外に家畜人工受精を実施しております。この人工受精は現在の畜産から取り離す事の出来ない事は吾々畜産の立場から認識しておかないればならない事であり既に現在これらが進められ畜産的に発展しているともいえよう。当研究生は先生の指導によりこれらの方面にも研究を積んでおります。特に校外

「農村」において日曜日という休日もなく農村の立場を実際に見てどの様な指導をすれば良いのか前途を考察し各個人がその問題に対して月二回に行われる雑談会（第一金曜日第三金曜日）において追求し新しい方向によって目的に達成されております。一例を見ると精液採取や注入は一般的であって他に主眼とする事は繁殖障害によって経営を目的に達成する事が出来ません。卵胞が成熟すれば動物は発情を示し卵胞は破裂し成熟卵は卵液と共に卵巢外に排出する、これが排卵であるが発情が弱い為に排卵する事が出来ず発情であっても受精する能力がなく不可能な場合がありこの時には人工的に黄体を形成する為にホルモン注射にて処理する方法或は又た管理状態（飼養方法、季節）によって家畜体変動を見極め実際に指導的立場になってこの方面に対して進めております。他に診療にあたっては大、小家畜とを先生の指導によりその病気の症状などを確認しそれに対しての薬品の混合仕方それに注射方法などを身につけ自分の家畜などの診断治療をする事の出来る実力をつけております。又卒業論文など多数の仕事があります。獣研生は先に挙げた

様に課外活動が多く現に農村の指導的立場にあたって家畜の飼養管理に直面し連体方向において実際値し又專業化の中に入ってそれを知る事によって自己の開拓の第一歩ともいえよう。

### 家畜飼養学研究室

四年 菊池 一夫

家畜飼養学研究室は昨年海塩教授を室長に迎えて発足した畜産学科で一番新しい研究室です。

今日の農業経営法は米作主体より次第に有畜農業に移りつつあり、我々は近い将来その有畜農業経営を一般農民に指導する立場に立つものとして最も礎となる「家畜を飼育する」というその事に関して充分なる知識、技術が必要としますので。

そこで本研究室では家畜飼養に興味のある者、又卒業後飼養関係に進もうとする者、等が互に飼養に関する知識を高め、それを更に深く追求し、新しい知識、技術を有得することを目的としております。

そのために談話会を開き、各々自分で調査、実験したものを発表したり、質問した

り、討論したり、室長から飼養に関する話を聞いたりしております。  
更に談話会の席に於て、室員の親睦をはかるためにいろいろな行事予定を立てておられます。

室員は談話会の時以外も自由に研究室に出入りし、室長と話をしたり、先輩と話したり、自分の好きな仕事をしたり、人の仕事を手伝ったり出来るようになっております。

本研究室は充足以来まだ日が浅いので設備、その他は充分ではありませんが、現在綿羊二頭を使ってサイレージの消化試験を行っております。

本年度の予定は大体次の様です。

- ①現在進行中の消化試験のまとめ。
- ②新材料を用いての消化試験とそのまとめ。
- ③各種飼料作物の成分分析。
- ④室員の親睦を兼ねた見学旅行。
- ⑤畜産学会関東支部大会へ研究結果の発表。

尚、本研究員の室員は現在十八名です。今後入室される方は、まじめに飼養学を学びたいと思う者に限り、研究室の秩序を

乱したり、名前だけの室員で実際の活動は何もしないような者は、入室を遠慮して頂きたいと思っております。

### 養豚相談所

四年 田原 孝二

東京農業大学畜産学畜産学科に於ける養豚相談所は歴史も古く相馬清策先生の指導のもとに、我々学生が主体となって飼養管理を行い養豚に関する技術即分娩、流行性伝染病に対する注射、去勢等の技術を身につけながら研究に励んでいる。本研究室では飼養管理の技術を身につけることであつて他の研究室にはあまり見られぬもので安外おもしろい研究室である。

現在の飼育頭数は、繁殖豚雌五頭、肥育豚数二十一頭、種牡豚一頭、仔豚八頭である。又学生は豚の好きな者だけ集まっている。卒業生八名を送り出し現在少なく三年生だけ四名である。

現在行っている研究としては、発育促進剤フラゾリドン投与による肥育期間の短縮に関する実験、そして如何に飼料費を安くするか、生後二三週間で早期離乳を行つて

仔豚の増産とその後の発育に関するものや、自動給餌器を使用して労力の節約に関するもの等の研究である。

養豚相談所の学生の生活状況を記すと、本研究室に併設された宿泊所に寝泊りし、朝は六時に起床し朝の餌付を行い、十一時に昼の餌付、三時に夕方の餌付を行う。餌付は授業のないものを行う。

又我々学生は休暇を利用し先進地や種畜場の養豚所等に出かけ進んで養豚技術を身につけんものと研究に励んでいる次第である。

☆ ☆ ☆ ☆

## 畜友会便り

### 書記局

#### \* 昭和三十六年度事業計画

- 一月 講演会
  - 四月 機関紙発行
  - 四月 新入生観迎会
  - 五月 視察旅行
  - 六月 畜産学シンポジウム
  - 十月 講演会
  - 十一月 畜産学会関東支部会後援
  - 十一月 定期総会
- \* 三十五年十一月二十九日畜友会規定に基いて畜友会総会が行なわれた。新役員次の通り決定しました。

#### 役員

- 委員長 高山 昭夫 (三年)
- 副委員長 黒坂 明弘 (四年)
- 会 計 高洲 康広 (三年)
- 会計補佐 木口 靖夫 (三年)
- 書 記 江原 真弓 (二年)
- 若山 庄太郎 (三年)
- 加藤 弘雄 (三年)
- 木村 忠通 (四年)
- クラス委員

#### 監査委員

- 吉田 嘉夫 (四年)
- 加藤 栄太郎 (三年)
- 中村 輝夫 (三年)
- 笠原 秀成 (二年)
- 齊藤 俊六 (二年)
- 林 知正 (四年)
- 杉村 真由美 (三年)
- 森川 正孝 (二年)
- 平林 忠 (科長)
- 鈴木 正三 (主事)

#### 顧問

\* 二月八日文部省の学位審査会において、本学畜産科長、平林教授は、農学博士号を授与された。研究テーマは「家兎の喰糞現象に関する研究」である。

\* 一月二十八日、東西産業貿易K副社長、坂本伸明氏によるプロイラー産業についての公演と映画の会が行われた。

\* 畜友会に対する寄附金

- 一口 一金参千円也
- 東西産業副社長
- 坂本 伸明 様
- 一口 一金壹千円也
- 千葉県農業技術課
- 砂川 泰夫 様
- 一口 一金壹千円也

キューピーマヨネーズKK

青田 範 幸 様

\* 名誉会員は今後諸先生方の協力を得て、賛同を得る予定です。(若山記)



# 一つの意見

畜二宮崎 晃

今春三月でもって茂原分校との合併が成り、速くはなれていた先輩諸氏と同じ学園で研究に専心することの出来る喜びを遂にわがものとする事が出来るのである。また、同時に、昨年度発足したばかりの畜友会の活動もいよいよ軌道にのることが出来ると期待するのである。



実は、筆者自身発足当時の畜友会には多くの疑問をもち、この会の成立にも単に無益なものとの理由だけで反対の気持でもあった。しかし、それも一年生である筆者の未知からであったと許して頂きたい。皮肉にも「畜友会」が出来てから今日までこの会に降りかかって来た問題は重大であり、数多いものであった。農場問題、分校合併問題、それに付随せる研究室や実習農場の問題等々。これに対する個人の判断力は非常に弱いものであり、各人の知

識はバラバラであった。従ってそこに大きな団結は当然必要なものであって、この意味からも畜友会は重大な任務を負っていると思う。畜産学科の学生は誰れもが自分達の問題に対して畜友会の活躍に期待もし、必死に闘おうとしたに違いない。ところで、農場問題は買入れが一段落ついた。そして学長の夢は果しなく大きい。——酪農を取り入れた総合農場をつくる——と云う。そして総合農場の内容は——実習の休息時には男女が牛乳でも飲んで話し合っている——牛が草を食い、鶏が地面をつついており——と誠にうらかな春の日ざしのような空想をしてござる。——通学バスもつくる。都心からはなれて、澄んだ空気の中で、みっちり技術を身につけてもらおう——との親心はありたい。しかし今のわれわれには学長と同じ夢を追うことは出来ない。あの荒野に立つ時に先ず湧いてくるのは勇気への躍動でもない。これからの開拓の苦勞への不安でもない。勇気や躍動はのつべらぼうの大農場の前に小さくなってしまふ。学長の考えるような農場が完成された時、はじめてその苦勞も実を結ぶのだが学生はせいぜい四年しかないのだ。この段階のところで卒業していく者か云って納得させようとするならばあまりにも酷だと云える。

その関係者は当分あちらに残る——と云う。頭、胴、足とバラバラにされた研究体制。そんなふうには考えられるのである。やつと頭と胴がくついたと思つたら歩くための足がなくなつた。これではいくら歩けることも出来て歩くことが出来ない。頭と胴は生長しても、足は幼児の足である。そしてその運命にあるのが今のわれわれではないだろうか。その少しの間しんぼうすれば良くなるかも知れない。しかしそれでは過度期にあるわれわれは、しんぼうのしつぱなしで、将来他の太い足をもつた人達と共に歩むことが出来ないではないか。

さて、発足以来、日が浅いとはいへ、当面の諸問題に対して、しかもわが身の問題に対して畜友会は積極的であつたか。学長と団体交歩をしたといった話も聞かない。農場視察の報告もされなかつた。せつかく成長した会の運営に張り切つた気持がないように思えるのだ。ただ機械的に飲んだり、食つたり、あるいは講演会を開くことだけ気を使つて、そのうちに一年が過ぎてしまふ。それではこの会の存在は有名無実なものである。

学内には重要な問題が未解決のまま残されている。社会的には有畜農業の必要性が論じられ、それに伴つて農業問題は畜産を除いては考えられないまでになつて来ている今日、畜友会の積極的な活躍を望むのである。いや、望むというのはなまぬるい。齒がゆい気持なのだ。もちろん畜友会というのは役員を

指すこともあるけれど、それよりも畜産学科の学生の盛り上りと云うことも含んでいることは見逃がしてもらいたくない。

先日行なわれた講演会「プロイラー産業について」等はたびたび開いてもらいたいと思うがそれらについても学生同志の話し合いの機会をその直後に持つことも必要と思う。

とにかく、研究会、講演会、読書会、あるいは農村調査、工場見学等を通じて、会員の認識を高めると共に、口先だけでなく上記のものも着実に実行していくことによつて学的にも社会的にも価値ある会としたい。

次の会の催いは何だろうか。楽しみに待っている。そんな畜友会なら協力をおしむものはまずないだろう。特に昨年の収穫祭には畜友会が結成されていながらも統一されなかつたことは今もって残念だ。今年の収穫祭には日頃の活動の成果がみのあることを期待している。

## 寄せられた声について

書記局

先に先輩諸兄に畜友会特別会員入会問合せにつき書面にて連絡致しましたところ、独に一五〇名にのぼる返信を載しましたことを厚

く御礼申し上げます。皆々様から数多い御意見を載し、ここに記載致します。

一番多いものから申し上げますと、この会を意義あるものとして発展させ親睦を一層深められんことを強く叫び有名無実とならぬことを望むると共に会員と特別会員の交流の場を多く機会を与えてほしいとのこと。むろん畜友会としては望んでいると共に今後の課題でもあると思ひます。第二の点としては先輩諸兄かなり現任所、勤務先の問合せとその変動が多いと思はれるので対策として少なくとも毎年一回は住所録を変更分のみでも良いですから記載し連絡してほしい要望がありました。我々としては毎年機関紙行の際ここに掲示しておこうと思ひますが協力をお願いします。

さらに会費の件になります。今回は別として今後のことを考えるなら当然維持費程度は特別会員より会費徴収しても良いとの意見ですが、本部では寄付行為として、各位から協力を得ております。

最後に特別会員との連絡の方法として組織を作り現在の方法ですと会と個人的な関係になりがちであるので、特別会員は特別会員として数名の連絡委員をもうけることが望まし

いそうです。

以上が大要でありその他数ありますが皆様の一番疑問点をここに記載致します。

(続き)

して私は確率的な方法というものが全く間違つたものであるとは思ひませんが、自然辞証法を大きく取り入れて他の学問的分野と比較して遅れをとっている生物学をそれに関する農学や医学を大きく発展させていたことが、ダーウィンの進化思想を正しく発展させるものであり、未来の農学畜産学の進歩発展を約束するものであると確信する。そしてそれは今日とかく老衰固定化したメンデルモルガニズムに新風を吹き込み、遺伝学をよみがえらせる上で不可欠な根本思想であると考へる。なお小生はまだ分らぬところが数多く残っているが、あらゆる点で今後の勉学の課題としたい。

(畜二 滝川昌宏)

三十五年卒論一覽表

氏名	論題	指導者	備考
秋田 正	千葉県に於ける市販牛乳の品質について	鬼原	
江原 貞夫	鶏肉ソーセージ製造に関する研究	鬼原	
習田 嘉之	飼料作物に対する Gibberellin 処理の効果	長谷川	
花田 敏孝	ホルモンサイオラシール処理鶏(中雛)肉の変化に関する研究	海塩	
半田 鉄弥	鶏卵の孵化に関する観察と調査。一、鶏卵中の鶏胚の発育二、孵化率に関する調査(織部智宏君と協同研究)	海塩	
原田 種礼	乳牛に於けるカルシウム、磷の代謝	砂川	伊藤賞
林 泰弘	鶏肉大胸筋及び腿筋の Plasma Protein に関する研究	海塩	
本間隆一郎	幼豚に対する人工乳給与に関する調査	相馬	
堀 靖治	乳牛に於けるエネルギー代謝試験(牧草と稲藁)	相馬	
井上 登鯉	牛乳の遊離アミノ酸に関する研究	海塩	
石井 昭光	牛乳の遊離アミノ酸に関する研究	海塩	
加藤 浩一	鶏肉の遊離アミノ酸、特にグルタミン、ヒスチジン、チロシンの含量と消長について	鬼原	
小林 良平	鶏の血液型と産卵能力との関係	鬼原	
近藤 敬一	岩手県に於ける養豚の沿革と現況について	相馬	
今野 雅博	Tesintin に対する Gibberellin と Urea の併用に関する研究	相馬	
久須美慶爾	ホルスタイン種及びホルスタイン種の改良と登録制度に関する研究	相馬	
久世友三郎		相馬	
前川 敏之	鶏に対する抗酸化剤給与の影響について	石原	
万納 佑平	反芻動物の第一胃内に於ける醗酵能に関する研究	中海	
森 俊之	鶏肉のビタミンAに関する研究	鬼原	
武藤 信行	肉豚の肉質及び屠肉歩合に及ぼす影響	相馬	
長尾 昭雄	抗生物質耐性乳酸菌に関する研究	鬼原	
長崎健治郎	養豚経営の実態調査	相馬	
中嶋 正夫	鶏肉の防腐に関する調査研究	石原	
西原 孝	鶏肉の人工授精に関する研究	鬼原	
野上 忠信	白色レグホン種鶏肉の遊離アミノ酸の消長について	鈴木	伊藤賞
野村 慎一	八ヶ岳麓に於ける酪農実態と今後の自営計画について	鬼原	
萩原 国威	ブラジルに於ける畜産事情	平山	
恩田 達夫	鶏に於ける抗体の移動に関する研究	平山	
大場 義産	家兔初生児尿腺部の差異について	平山	
近江 弘明	鶏肉のホルマリン反応に関する研究	平山	
大岡 英俊	鶏卵の孵化に関する観察と調査	鬼原	
織部 智宏	鶏卵中の鶏胚の発育と孵化率に関する調査(半田君と共同研究)	海塩	伊藤賞
清藤喜三郎	実験的牛乳防腐に関する研究	野崎	
酒井 勝澄	育雛中に於ける家兔糞給与の影響	鬼原	
三宮 一広	産卵の尿クレアチンに関する研究(清水君と共同研究)	平山	
佐藤 理一	山羊分泌液の血液学的研究	海塩	学長賞
柴田 正男	静岡県下に於けるヨークシャ種及びパークシャ種の産卵仔数並びに成育調査	相馬	

清水 勇和	反芻家畜に於ける飼料処理の影響(1) 第一胃内揮発性脂肪酸の組成に対する飼料処理の影響(2) 消化率に対する飼料処理の影響	海塩	
清水 英昭	産卵畜の尿クレアチン排泄に対する性別及び年齢別に依る体躯測定に関する調査	相馬	
鈴木 弘男	植物蛋白添加「ヨーグルト」に関する研究	鬼原	
只野 蕃樹	鶏肉燻煙加工時の燻煙成分吸収について	鬼原	
高木 智徳	牛初乳中免疫性蛋白質の積への移行に関する血清学的研究	鈴木	
高野 源晴	雄鶏に対する Euvestin Sol 注射の効果	鈴木	
滝谷 重一	鶏体の部位に依る脂肪組織の理化学的性状について	鬼原	
田宮 巧	牧野改良殺草剤クサトルに依る牧野改良並びに肥料の効果	鬼原	
田中 乾吉	原料乳の鮮度保持に関する研究	平林	
谷口喜代次	豚精液中の血液型物質について	鬼原	
谷口 俊孝	反芻動物の第一胃に於ける醗酵能に関する研究(万納君と共同研究)	鈴木	
田島 靖夫	蜜蜂に依る花粉塊の研究	海塩	
塚田 武	鶏卵の新鮮度に関する実験的研究	海塩	
津野 忠彦		鈴木	
内山 褐	白色レグホーンの鶏体脂肪に関する研究	鬼原	
鶉沢 良	牛乳中に於ける人血液物質について	鈴木	科長賞
源辺 弘	反芻家畜に於ける飼料処理の影響(清水君と共同研究)	海塩	科長賞
山田 春夫	反芻家畜に於ける飼料処理の影響(清水君と共同研究)	海塩	科長賞
山本 清一	市販肉豚配合飼料粉餌給与に関する研究	相馬	
山下 征児	初生雛に於ける雌鑑別の新法について	平林	
吉田 重雄	盛岡孵化場に於ける最近十年の孵化成績について	石原	
吉岡 陸祐	鶏肉の塩漬に於ける塩化ナトリウムと昆虫駆除、忌避剤の効力試験について	鬼原	
杜 忍	神石牛について	平山	
滝口 直道	辛子油糠給の飽料価値について	鈴木	
小崎 博信	新潟県における酪農経営について	鬼原	
徳重 英昭	温度湿度体温と解の飲水量との関係	海塩	
山崎 卓司	動物甲 DE-FEED 投与に依る孵化	鈴木	
上野 正明	育雛産卵試験	石原	
松本 治夫	解の消化生理に及ぼす砂の影響	鈴木	

東京農業大学畜産学科

畜友会規定

第一章 総則

第一条 本会は東京農業大学畜友会と称する  
 第二条 本会は東京農業大学在校生、教職員、および卒業生をもつて、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄することを目的とする。

第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。  
 第二章 会 員  
 第四条 本会の会員は左記の三種をもつて組織する。  
 一、正会員 二、特別会員 三、名誉会員  
 正会員は東京農業大学畜産学科在校生、特別会員東京農業

大学畜産科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの

第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

### 第三章 役員及び機関

第六条 本会は左記の役員をおく。

一、委員長一名 副委員長二名 書記二名 合計一名  
会計補佐一名 クラス委員八名

二、監査員四名

第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条 委員長、副委員長、書記、会計は正会員の中より総会において計七名選出する。

委員は各学年二名、監査委員は各学年一名づつ選出し、続

第九条 役員が生じた場合、速やかに補充しなければならない。

第十條 総会は正会員により構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一條 総会は正会員の三分の一以上により成立する。

第十二條 定期総会は、年一回十一月に召集する。

臨時総会は、左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員の上三分の二以上が必要と認めるとき。

第十三條 総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四條 総会に於ける議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五條 総会の議決は、出席者の過半数によつて議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六條 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

### 第四章 業務

第十七條 第六条第一項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この召集は委員長が行なう。

第十八條 本会の事業年度は十二月一日より翌年十一月末日迄とする。但し会計年度は十一月一日より翌年十月末日までとする。

第十九條 本会は左記の業務を行なう。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

### 第五章 会計

第二十條 会費は年間五百円とする。その納入は四ヶ年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。

但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。

第二十一條 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九條の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。

寄附行為は認める。

第二十二條 納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三條 決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

### 第六章 監査

第二十四條 本会の業務を円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五條 監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査をおこなう。監査は監査委員が必要と認めれば随時でき

る。

第二十六條 監査委員は第六条一項の役員兼任は出来ない。

第二十七條 本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八條 本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

第二十九條 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

(編) (集) (後) (記)

※春雨だ。お昼に机に向かって割付けを始め  
てから、ふうふう言いながら、どうやら、  
最後のページまで到着した。午前二時を過  
ぎて、さっきまで、はり切っていた編集委  
員諸君とろりとした目に笑顔の一つもな  
かった。……三月四日のこと。

※創刊号の発行をみることは、先生、先輩、  
正会員の情熱のおかげで深く感謝する次第  
であります。但し、装丁は五割の保障を与え  
るとして、内容はまだまだ充実したいです  
ね。第二巻はより発展したものでありたい  
ですね。先輩諸兄！ 今後よろしく御協力  
を。(第二十一条寄付行為は認める条項と  
共に)

※四〇度の熱を押し、原稿を書いて下さっ  
た平林先生、どうもすみません。それか  
ら、連絡不手際のため、全部の先生方に原  
稿載けなかつたこと、すみません。

※農政における畜産の比重は愈々最高頂に達  
した。但し就職のみにとらわれては危険、  
日本農業に占める畜産の認識と共に真の畜  
産技術者が影をひそめつつあるとの先輩須

田氏の発言「心せよ、なんじが先に来るも  
のは何ぞ。」今年是新入生に紅二点を迎え  
て、畜産学科発展の年とはのクラス委員乙  
君の言「心せよ。」

※移転が一応段落を向えたがまだまだ、ガタ  
ガタの校内、これが先生方の家庭にまで波  
及しては我々以上に想像に絶するものがあ  
る。しかしその中においても、着々と学問  
の探究はなされなければならない。

※ともかく、永久に、この会誌をかわいがっ  
て下さいね。もっと企画性をフルに發揮し  
て学生生活における知、徳、技のバックボ  
ーンとしましょう——ね。でわ失礼(T)

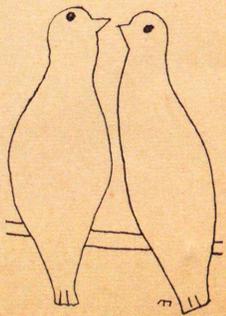
表紙デザイン入選発表

今回は応募者少なく全部で三通でした。編  
集委員の合議の結果、三年桜井昭雄君の作品  
を採用しました。今後もどしどし応募下さ  
い。

ふじみのの執筆は師範岡部満枝氏に協  
力を得ました。厚く感謝します。

住所、杉並区和田本町一〇五二

岡部 満枝



昭和三十六年四月八日 印刷  
昭和三十六年四月十日 発行

ふじみのの 第二号

編集者

黒坂 明弘 林 和正  
木村 忠通 若山庄太郎  
加藤 弘雄 高洲 康弘  
吉田 嘉夫 笠原 秀一  
木口 靖夫 高山 昭夫

発行所 東京都世田谷区世田谷四の四六〇

農大畜友会

TEL(四三)五一七五(呼)

印刷所

共立印刷株式会社  
(三六) 四二四六〜七



合成副腎皮質ホルモン製剤

## 獣医用 **プレドニロン** 注射液 「タケタ」

本剤はヒドロコルチゾンの構造の一部を人工的に変えて副作用を弱め、しかも抗炎症・アレルギー・リウマチ作用は3～5倍も強力になった合成副腎皮質ホルモンでケトージス、ジステンパーその他種々の疾患に優れた効果を現わす。

〔成分〕 100cc 中プレドニロン 100mg を含有

〔包装〕 10cc (100mg) バイアル入

製造発売元 武田薬品工業株式会社